

青森県埋蔵文化財調査報告書 第295集

隠川(11)遺跡Ⅱ

— 国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2001年2月

青森県教育委員会

隠川(11)遺跡Ⅱ

— 国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2001年2月

青森県教育委員会

序

五所川原市南東部の丘陵地帯には縄文時代から古代・中世・近世までの遺跡が数多く分布しています。なかでも古代須恵器の生産地であった前田野目周辺では近年の磁気探査調査によって窯跡が多数確認され、範囲・規模共に拡大しつつあり、北東北の中でも一大生産地の様相を呈してきています。

隠川(11)遺跡は、国道101号浪岡五所川原道路建設事業の実施に先立ち、平成9年度にA区の発掘調査が行われており、この報告書は平成11年度に行われたB区を発掘調査した結果をまとめたものです。

調査では、縄文時代の土器・石器をはじめとして、弥生時代の土器、平安時代の土師器・須恵器、碁石状土製品等が出土しました。

この調査によって、縄文時代や平安時代に隠川(11)遺跡及びその周辺で生活していた人々の貴重な資料を得ることができました。

今後、この調査によって得られた成果が、地域の歴史・文化の理解に役立つことができれば幸いです。

おわりに、調査の実施及び報告書の刊行にあたって種々ご指導、ご協力をいただいた、関係各位に対して厚くお礼申し上げます。

平成13年2月

青森県埋蔵文化財調査センター
所長 中島邦夫

例 言

- 1 本報告書は、平成11年度に実施した五所川原市隠川(11)遺跡B区の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、青森県遺跡台帳に遺跡番号05071として登録されている。
- 3 本報告書は青森県教育委員会が編集した。執筆者名は文末に付した。
- 4 試料の分析、鑑定等については、次の方に依頼した(敬称略)。

石器の石質鑑定 青森県立八戸南高等学校教諭 佐々木 辰雄

- 5 本書に掲載した地形図(遺跡の位置・周辺遺跡)は、国土地理院発行の5万分の1の地形図「青森西部」を複写したものである。
- 6 挿図の縮尺は、各図ごとにスケールを付してある。なお、写真の縮尺は統一していない。
- 7 遺構・遺物の文・図中での表現は、原則として次の様式・基準によった。
 - (1) 遺構内外堆積土の注記には、「新版標準土色帖」(小山、竹原;1994)を用いた。
 - (2) 層位名は基本層位を「I・II・III…」などのローマ数字、遺構内堆積土層位を「1・2・3…」などの算用数字で表記している。
 - (3) 遺物には観察表・計測値を付した。計測値の単位は土器類はcm、石器類はmm、重量はgである。
 - (4) 図中で使用したスクリーントーンを表示は次のとおりである。



火山灰



焼土



内面黒色処理
外面黒変部

- (5) 遺物分布図で使用した記号は、以下のとおりである。

●土器 ▲礫・石器

グリッド別遺物分布図の記号は図中に付してある。
 - (6) 火山灰の呼称は、白頭山火山灰とB-Tmを併用している。
- 8 引用・参考文献については本文末に納めた。
 - 9 発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
 - 10 発掘調査及び本報告書作成にあたって下記の諸氏から御協力・御助言を得た(順不同、敬称略)。角張淳一、手塚孝、菊地政信、清野彰史、中田書矢、藤原弘明、本田泰貴、長内孝幸、宇留野主税

目 次

序

例 言

目 次

図版目次・写真目次

第Ⅰ章 調査要項	1
第Ⅱ章 調査方法と調査経過	4
第1節 調査方法	4
第2節 調査経過	6
第Ⅲ章 遺跡周辺の環境	7
第1節 遺跡の立地及び地形	7
第2節 周辺の遺跡	9
第Ⅳ章 検出遺構と出土遺物	11
第1節 検出遺構	11
1 土坑	11
2 溝跡	22
3 焼土・火山灰集中区	26
第2節 出土遺物	29
1 縄文土器	29
2 弥生土器	33
3 石器・石製品	34
4 土師器・須恵器	36
5 陶磁器	36
6 土製品	37
7 金属製品	37
第3節 遺物出土状況	38
第Ⅴ章 まとめ	44
引用・参考文献	45

報告書抄録

図版目次

図1	遺跡の位置	2	図13	第4・5号溝跡	25
図2	調査区及び周辺の地形・環境	3	図14	焼土・火山灰集中区	27
図3	調査行程及びグリッド配置図	5	図15	旧沢地形遺物出土状況	28
図4	調査区域内の基本層序	8	図16	出土遺物 縄文土器1	31
図5	周辺の遺跡	9	図17	出土遺物 縄文土器2	32
図6	遺構配置図	10	図18	出土遺物 縄文土器3・弥生土器	33
図7	第1～9号土坑	18	図19	出土遺物 石器・石製品	35
図8	第10～18号土坑	19	図20	出土遺物 土師器・須恵器・陶磁器	36
図9	第19～27号土坑	20	図21	出土遺物 土製品・金属製品	37
図10	第28～30号土坑	21	図22	グリッド別遺物分布図	40
図11	第2号溝跡	23	図23	遺構外出土土器接合関係	41
図12	第3・4号溝跡	24			

写真目次

写真1	調査区遠景・基本層序・第1号土坑・第2号土坑・第3号土坑・第4号土坑・第5号土坑・第6号土坑
写真2	第7号土坑・第8号土坑・第9号土坑・第10号土坑・第11・12号土坑・第13号土坑・第14号土坑・第15号土坑
写真3	第16号土坑・第17号土坑・第18号土坑・第19号土坑・第20号土坑・第21号土坑・第22号土坑・第23号土坑
写真4	第24号土坑・第25号土坑・第26号土坑・第27号土坑・第28号土坑・第29号土坑・第30号土坑遺物出土状況・第30号土坑
写真5	第2号溝跡・第2号溝跡セクション・第3号溝跡・第3号溝跡セクション
写真6	第4号溝跡東端部・第4号溝跡農道東側・第4号溝跡農道西側・第4号溝跡セクション・第5号溝跡・第5号溝跡セクション
写真7	焼土・火山灰集中区・焼土・火山灰集中区遺物出土状況・旧沢地形検出状況
写真8	農道部遺物出土状況・遺物出土状況
写真9	基石状土製品出土状況・遺物出土状況・調査風景・工用道路部分完掘・調査区完掘1・調査区完掘2
写真10	出土遺物 縄文土器
写真11	出土遺物 縄文土器
写真12	出土遺物 縄文土器・弥生土器
写真13	出土遺物 石器・石製品・土師器・須恵器・陶磁器・土製品・金属製品

第I章 調査要項

1 調査目的

国道101号浪岡五所川原道路建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する五所川原市隠川(11)遺跡の埋蔵文化財の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

2 発掘調査期間

平成11年4月19日から同年8月31日まで

3 遺跡名及び所在地

隠川(11)遺跡(青森県遺跡番号 05071) 五所川原市大字持子沢字隠川355、外

4 調査対象面積

5,400平方メートル

5 調査委託者

国土交通省東北地方整備局青森工事事務所

6 調査受託者

青森県教育委員会

7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査協力機関

五所川原市教育委員会

9 調査体制

調査指導員	村越 潔	青森大学教授(考古学)
調査協力員	岩見 貞夫	五所川原市教育委員会教育長
調査員	工藤 清泰	浪岡町史編纂室主幹(現生涯学習課文化班長)(考古学)
	伊藤 昭雄	青森県立木造高等学校車力分校教諭(地質学)

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所長	中島 邦夫
次長(調査第一課長兼務)	成田 誠治
総務課長	成田 孝夫(現工業振興課課長補佐)
調査第三課長	木村 鐵次郎
調査第一課文化財保護主査	笹森 一朗
調査第三課文化財保護主事	浅田 智晴
〃 調査補助員	西谷 久美子
	塩谷 弥香
	浅利 康子
	相馬 誠

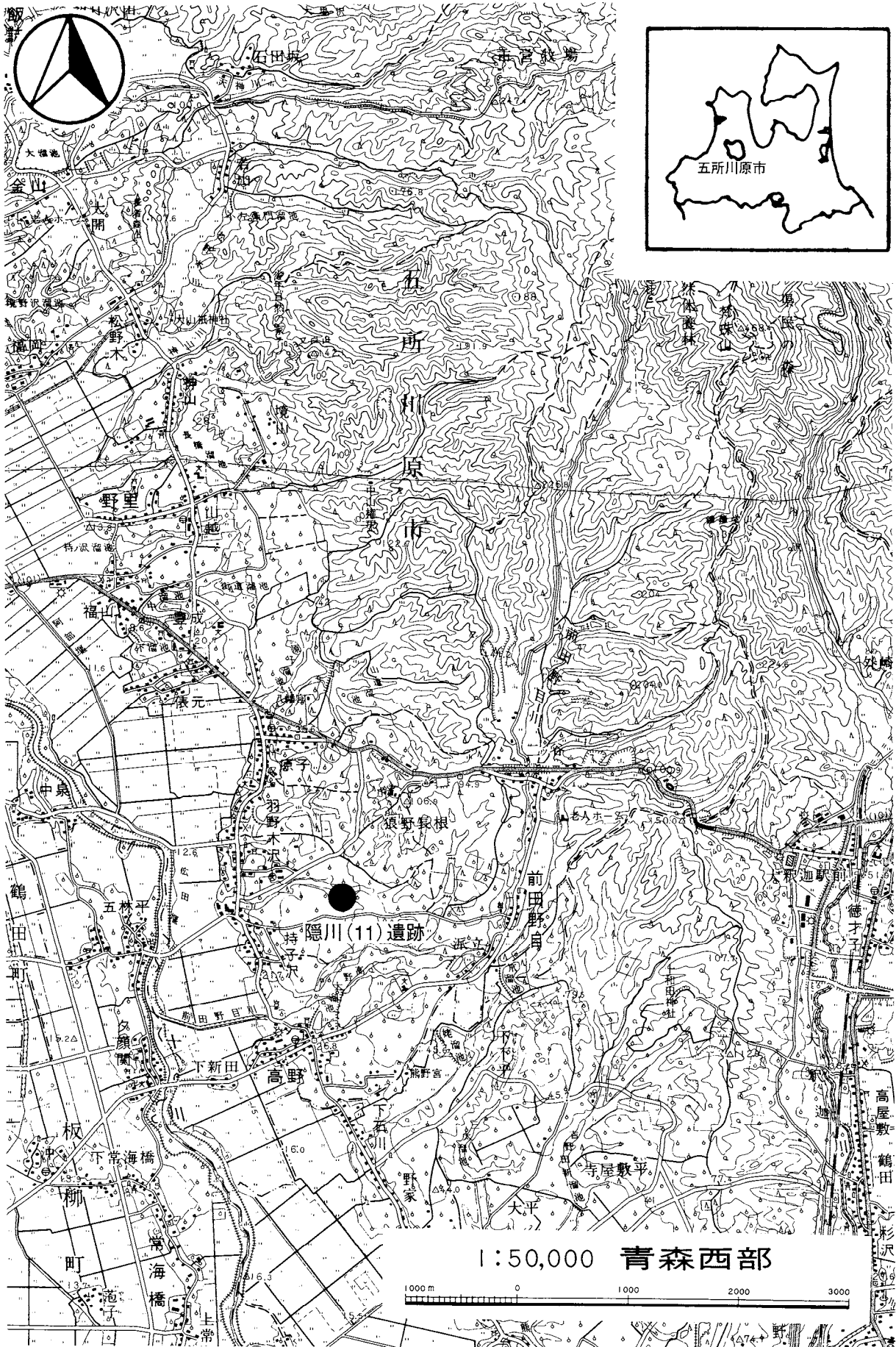


図1 遺跡の位置

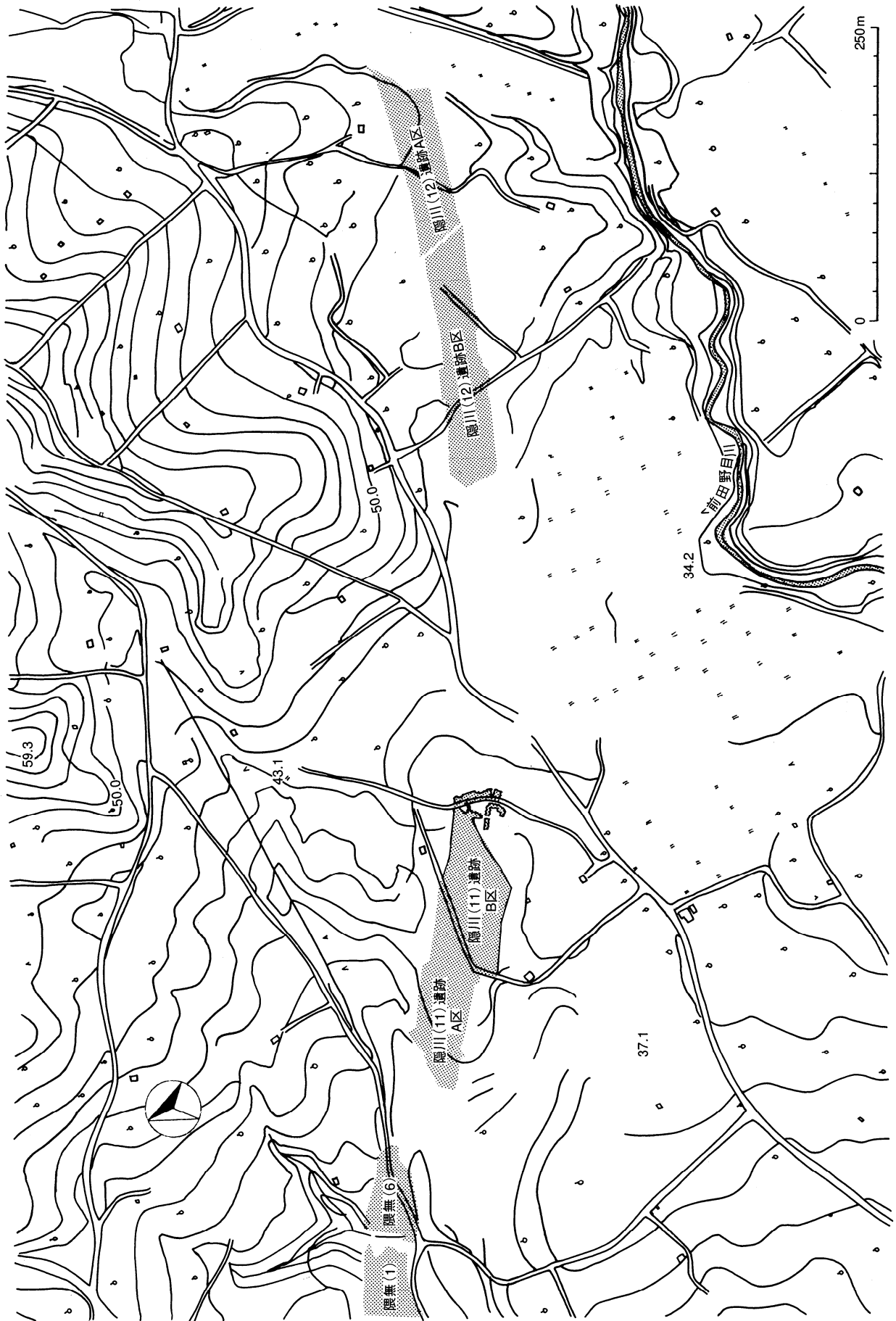


図2 調査区及び周辺の地形・環境

第Ⅱ章 調査方法と調査経過

第1節 調査方法

1 調査区域の設定

今回調査した隠川(11)遺跡は、平成9年度に青森県埋蔵文化財調査センターが調査した、隠川(11)遺跡A区の南東部分に位置するB区と呼称される部分で、調査区域のグリッド等も前回の調査のものを踏襲し、グリッドの呼称は北東隅としている。

2 発掘調査

1) グリッド単位で調査区を拡張する方法を採ったが、工事用道路部を優先した調査のため、前半は優先部分に西側から東側に1～10までのトレンチを設定して順次拡幅していった。その他の調査区も、工事の進行状況に応じて進めていかなければならなかったため、基本的にはブロック毎の調査となった。

2) 粗掘りは、一部重機を使用しながら層位的に進め、遺物・遺構を確認してから、下層の掘り下げについて判断した。

3 実測図の作成

1) 遺構については、大型の遺構がほとんど検出されなかったため、2分法によって土層観察用のベルトを設定し、精査した。

2) 遺構の実測図(平面図・断面図)の縮尺は20分の1を原則として作成した。

3) 遺構内出土遺物については、必要に応じて分布図を作成した。

4) 遺構外出土遺物については、原則としてポイント・レベルを記録して取り上げた。

5) 調査区の基本土層については、必要に応じて縮尺20分の1の実測図を作成した。

4 写真撮影

1) 遺構については、確認状況・土層断面・遺物出土状況・完掘状況等を中心に撮影した。

2) その他必要に応じて、基本層序、遺跡の状況・調査状況についても記録した。

3) 使用カメラは35ミリカメラで、フィルムはモノクロームとカラーリバーサル(スライド)及びネガカラーの3種類のフィルムを主に使用した。

(笹森一朗・浅田智晴)

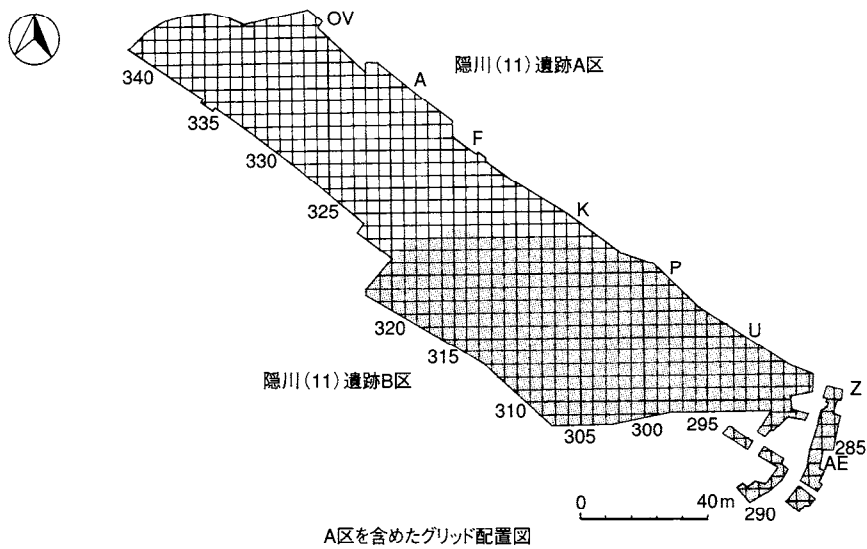
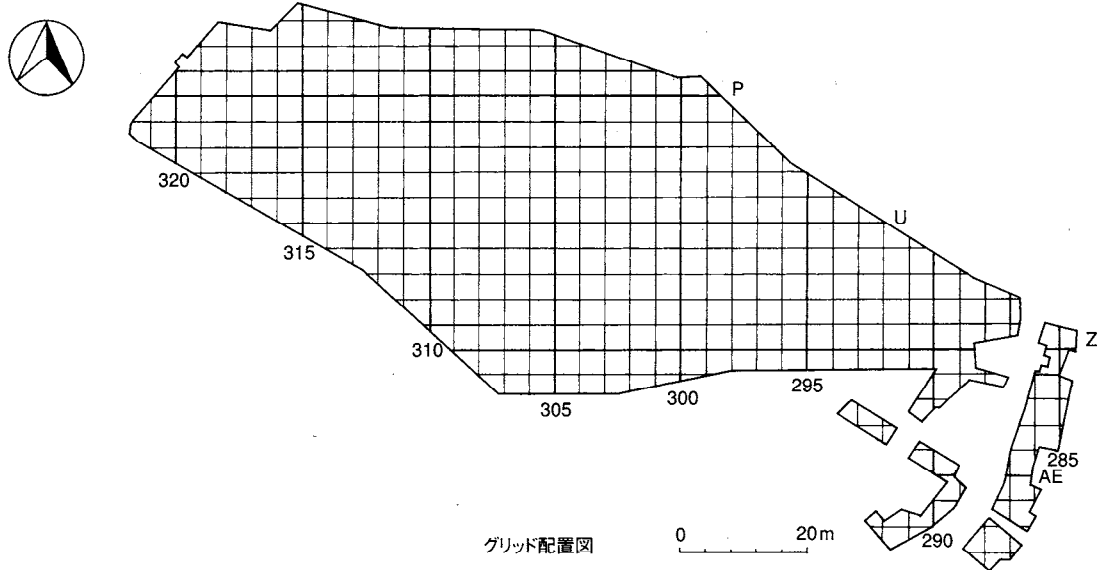
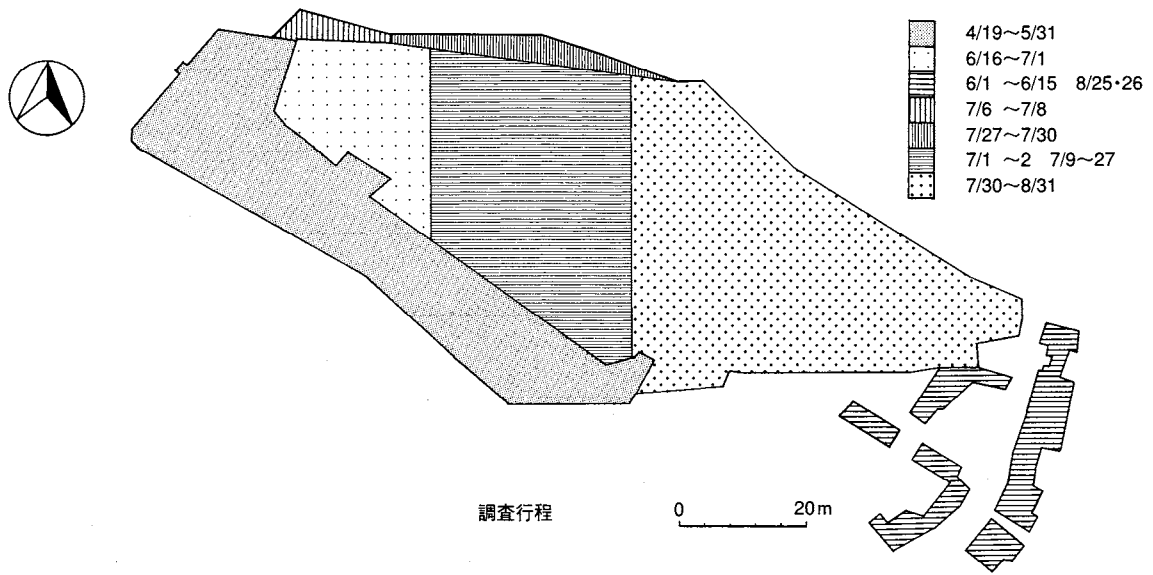


図3 調査行程及びグリッド配置図

第2節 調査経過

平成11年4月19日、発掘調査器材等を現地に搬入し、調査区域内の環境整備を行うとともに、グリッド設定の杭打ちを行いながら、調査区の中でも緊急を要する工事用道路部にトレンチを設定し掘り下げを行っていった。

4月下旬、各トレンチからは遺物が散漫に認められた。A区に比べ遺物量や遺構の密度は希薄な様子が認められた。

5月中旬、土坑・溝跡が検出され、精査を行った。遺物の取り上げも並行して行った。

5月下旬、工事用道路部の精査を終了し、残りの調査区の掘り下げを開始した。

6月上旬、工事用車両が行き交う中での調査のため、道路に接する部分では細心の注意を払いながら、遺構確認・精査、遺物取り上げを行った。

6月中旬、引き続き遺構確認と精査を行った。調査区南東端にある現有農道を挟んで東側に数カ所トレンチを入れて遺構の有無を確認したところ、平成9年度の調査で検出された第1号溝跡(SD-01)と同一遺構と思われる溝跡(SD-04)が確認され、台地を区切るように構築されている様子がうかがえた。遺構外からは石鏃や銭貨等が出土している。

7月上旬、A区に接する農道部からは比較的多くの遺物が出土したが、それに伴うような遺構は検出できなかった。

7月中旬、遺構は土坑が数基検出され、精査を行った。遺物は遺構外から散漫に出土し、取り上げを行った。

7月下旬、調査区の南東端部で焼土及び火山灰が帯状に検出された。

8月上旬、天候にも恵まれ調査は順調に進んだ。焼土及び火山灰は調査区南側の旧沢地形に沿って検出され、広範囲に及ぶことが判明した。

8月31日、遺構精査終了後、調査区内の清掃、器材の撤収、遺物の搬出等を行い調査の全日程を終了した。

(笹森・浅田)

第Ⅲ章 遺跡周辺の環境

第1節 遺跡の立地及び地形

位置 隠川(11)遺跡は、青森県五所川原市大字持子沢字隠川355外にあり、五所川原市の南東端に位置する。JR五所川原駅からは直線距離にして約9.5kmほど離れている。本遺跡周辺の現況は、大半がリング畑となっているが、本遺跡南側を西流する前田野目川沿いには水田が営まれている。

本遺跡の東側約250mには隠川(12)遺跡(青埋報第244・260集で既報告)が存在し、本遺跡A区北西側には、隈無(6)遺跡(青埋報第237集で既報告)が沢を挟んで対峙している。

地形 本遺跡は津軽山地南端、梵珠山地西縁に分布する前田野目台地上に立地し、調査区内の標高は約37～39mを測る。前田野目台地に段丘面が三面存在することは、現在までの報告で共通の見解となっているが、その捉え方には中位段丘面、低位段丘面において若干の差異が見られる(伊藤1997、山口1998)。本遺跡が存在する段丘面は、前田野目川の右岸、北側に位置する。概ね2%程度の勾配で平野部側に緩傾斜しているが、調査区域においてはほぼ平坦な台地といえる。前田野目川は津軽山地南端部の水系で、前田野目台地内を西流し、津軽平野東端部を北流する十川と合流する。平野への出口付近にあたる五所川原市高野には高野大溜池が存在する。また、隣接する隠川(12)遺跡と隠川(4)遺跡の間には前田野目川の枝谷が存在し、現在の狼野長根公園まで伸びている。

今回の調査区内には、現在ではほぼ埋没が完了している浅い沢地形が、R～AA-290～302グリッドにかけて検出された(図14・15)。R～X-293～296ラインまでは南北方向に伸び、Y-294グリッド付近で南東、南西方向に二股に分かれ、調査区内での平面形はY字状を呈する。三方向とも調査区外に伸びており、全体像は不明である。現地表面の等高線を見ると、この部分には北東から南西方向に向かって緩やかな沢が入るような湾曲が示されている。また、南西側の端部を軸線上に調査区外へ延長すると、現在も利用されている小さな排水路が存在する。この軸方向に第2号溝跡や近年の溝(旧SD-01)も沿っていることから、沢埋没後も若干窪んだ部分を利用して、排水等に利用していたものと思われる。覆土は基本的に基本層序第Ⅲ層のみとなっており、その堆積前及び堆積過程において焼土及び白頭山火山灰(B-Tm)が小さな纏まりを持ちながら、一部では折り重なるようにして堆積している。詳細は後述するが、白頭山火山灰(B-Tm)の堆積状況等から火山灰降下時、すなわち10世紀前半にはまだ埋没していなかったと考えられる。砂礫層等の確認はされなかったことから、常に水が流れるような状況ではなかったものと思われる。

基本層序 今回調査を行ったB区の基本層序は、前回調査を行ったA区の基本層序(第260集参照)と比較しながら、共通の認識が持てるよう心掛けた。図4に示した今回の土層断面図、及び注記は、P・Q-297グリッドに設けた土層観察用のトレンチ北壁で作成した。調査前の土地利用状況はリング畑であった為、耕作等による削平、改変を大きく受けており、一部ではかなり深い部分まで影響が及んでいた。また形成時期は不明であるが、風倒木痕も多数確認された。そのため確認面での状況は良好ではなく、特に調査区中央部は状況が悪かった。以下に今回観察された各層の概要を示す。

第I層 表土、耕作土層。草根多く乾きやすい。ビニール袋等が混入し、近年の廃棄物を処理した穴

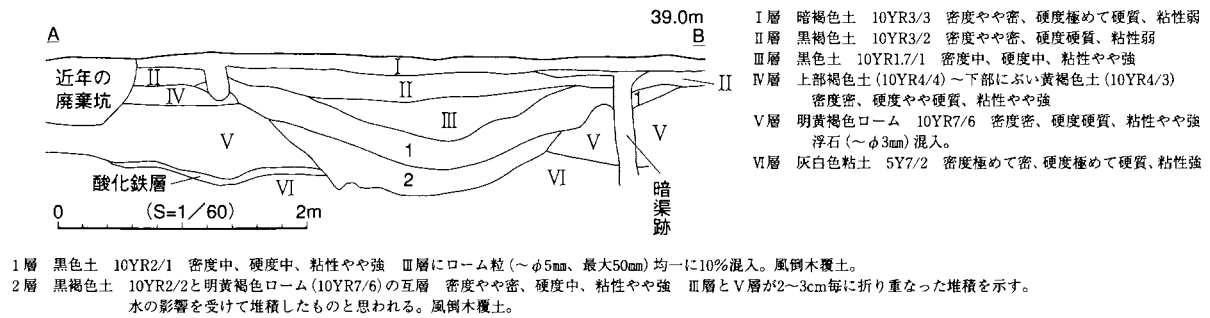


図4 調査区域内の基本層序

の覆土の母材ともなっている。A区の第I a層相当。

第II層 第I層と同様耕作土。乾きやすい。第III・IV層が削平され、第V層上に直接堆積している個所が存在する。そのため層界はほぼ水平になっている。恐らく耕作に伴う整地に起因するものと思われる。A区の第I b層相当。

第III層 保水力が強い。遺物包含層。また焼土、火山灰(B-Tm)を包含している。遺構覆土、風倒木痕覆土はこの層が母材となっているものが多い。A区の第II・III層相当。従って細分は可能であったと思われるが、確認できなかった。

第IV層 第III層から第V層への漸移層。下部ほど明度が増す。削平により存在しない個所も存在する。

第V層 ローム層。本層上面を遺構確認面としている。調査区内で弱干凹凸が見られる。乾燥すると脆い。上部で浮石の混入が確認されるが、その対比については研究者によって相違点が見られるため、今後の課題となる。層厚は調査区内においてはほぼ均等である。

第VI層 粘土層。層内には不均一に酸化鉄粒が50%弱混入する。乾燥すると縦方向にクラックが形成される。第4号溝跡、風倒木痕はこの層まで掘り込む部分も存在する。不透水層のため、雨が降ると層上面から水が湧き出してくる。本層上面に酸化鉄層(層厚~50mm)が形成された要因の一つと考えられる。本層がいわゆる前田野目層かどうかについては、現段階では見解の相違が見られるため、判断を留保したい。

以上概要を述べたが、前田野目台地内の地形環境に関しては未だ未確定な部分が存在している。五所川原窯跡群を抱える本地域において、早い段階で解決されなければならない課題であると考え。また、資料蓄積が多いとは言えないが、考古学の方面からも積極的に働きかけていかなければならない部分であると思われる。

(浅田)

第2節 周辺の遺跡

隠川(11)遺跡は五所川原市の南東部、その源を白神山系に発する岩木川をはじめとする大小の河川により形成された沖積平野である津軽平野と、津軽半島を形作る中山山地南端部に位置する梵珠山を含む大釈迦丘陵部が接するあたりに位置する。周辺には縄文時代から古代・中世・近世までの遺跡が多数所在している。特に、青森県内の古代須恵器生産の拠点である前田野目周辺では、近年の磁気探査調査により多数の窯跡が確認され、範囲・規模共に拡大しつつある。また、磁気探査以外にも平成9年に犬走窯が開墾作業中に発見され、緊急の調査が行われている。

国道101号浪岡五所川原道路路線内及び周辺にも多数の遺跡が存在する。桜ヶ峰(2)遺跡は前田野目川左岸の河岸段丘と大釈迦丘陵の境に位置し、縄文、弥生、続縄文時代の遺物が出土している。隠川(3)遺跡は前田野目川右岸の台地上に位置し、縄文～弥生時代の遺物や平安時代の竪穴住居跡などが検出されている。隠川(2)遺跡は本遺跡の東方約600m、隠川(3)遺跡の北方約100mの前田野目川右岸の丘陵部に位置する。農免農道の整備事業に伴い行われた調査では、ロクロピットを有する平安時代の竪穴住居跡や方形の周溝等が検出されている。隠川(12)遺跡は本遺跡の東方約250mの前田野目川右岸の台地上に位置し、縄文時代の溝状土坑や土器埋設遺構、平安時代の土坑や並列溝状遺構などが検出されている。隈無(6)遺跡は本遺跡A区と谷を挟み対峙した舌状の丘陵部に位置し、縄文時代中期の集落跡の他、晩期の小規模な捨て場が検出されている。隈無(1)遺跡は隈無(6)遺跡と小さな谷を挟んだ台地上に位置し、縄文時代中期の集落等が検出されている。隈無(2)遺跡は隈無(1)遺跡と同一の台地上に位置し、縄文時代の土坑、平安時代の竪穴住居跡の他、近世の火葬場跡が検出されている。(笹森)

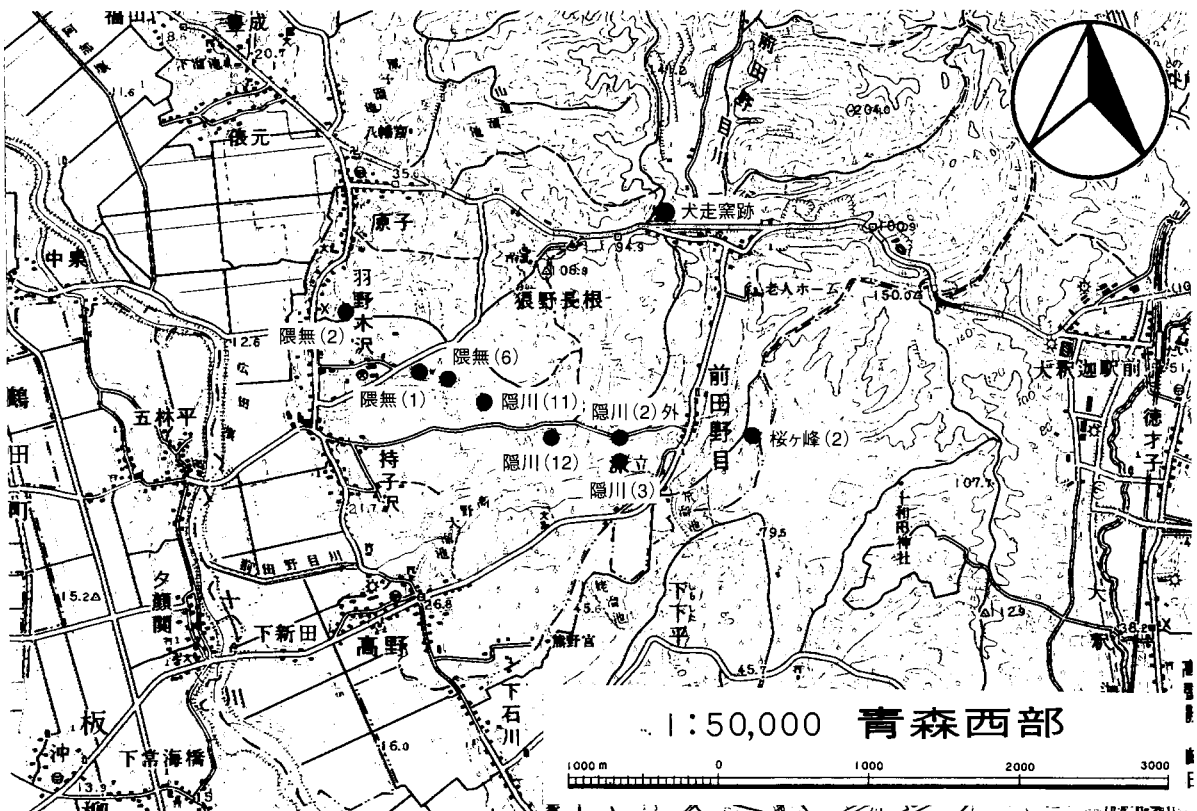


図5 周辺の遺跡

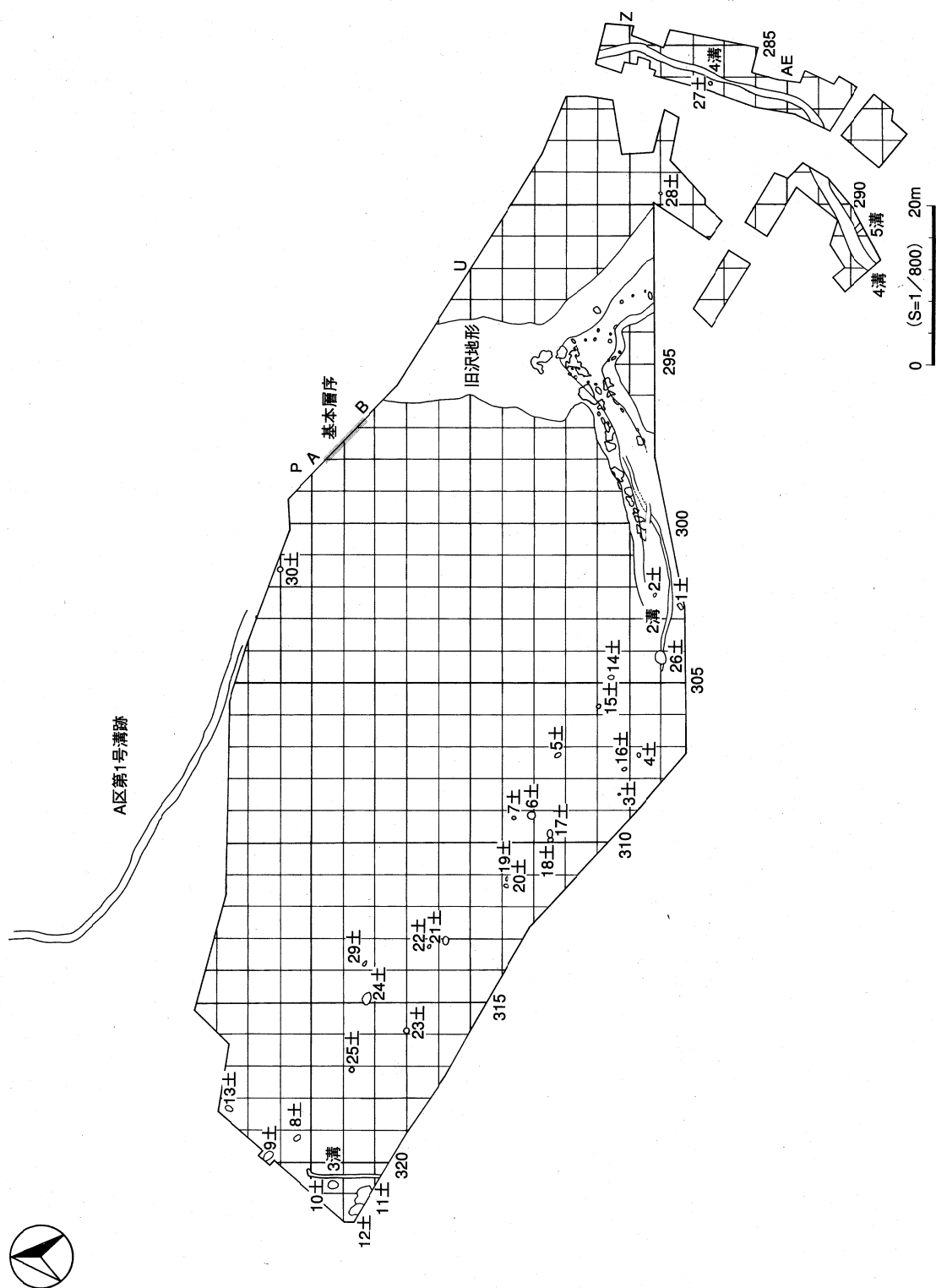


図6 遺構配置図

第IV章 検出遺構と出土遺物

第1節 検出遺構

1 土坑

土坑は合計30基検出された。この内、時期決定できたものは縄文時代3基、平安時代2基の計5基にとどまった。

第1号土坑(SK-01)(図7)

[位置・確認] AA-302グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は長方形を呈し、長軸90cm×短軸55cm、深さ12cmを計測する。

[壁・底面] 壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 1層である。

[出土遺物] なし。

[時期] 時期決定の根拠に欠け、不明である。

第2号土坑(SK-02)(図7)

[位置・確認] Z-302グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は楕円形で、長軸57cm×短軸38cm、深さ12cmを計測する。

[壁・底面] 壁は底面よりやや急に立ち上がり、底面は中央部に向かいやや傾斜している。

[堆積土] 3層に分層できた。第3層中には白頭山火山灰(B-Tm)と思われる火山灰を少量含んでいる。

[出土遺物] なし。

[時期] 覆土中の火山灰より、平安時代の土坑と思われる。

第3号土坑(SK-03)(図7)

[位置・確認] Z-301グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は円形で、長径35cm×短径33cm、深さは27cmを計測する。

[壁・底面] 壁は底面より一部垂直に立ち上がる部分も見受けられるが、その他は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。

[出土遺物] なし。

[時期] 断面形からは柱穴の可能性も考えられるが、時期決定の根拠に欠け不明である。

第4号土坑(SK - 04) (図7)

[位置・確認] Z - 307グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。

[重複] 覆土第3、4層の状況から、重複の可能性はある。

[平面形・規模] 平面形は隅丸方形で、長軸42cm×短軸38cm、深さ29cmである。

[壁・底面] 壁は底面よりやや急に立ち上がり、南西部と北東部にテラスを有する。底面は平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。

[出土遺物] なし。

[時期] 柱穴の可能性もあるが、時期決定の根拠に欠け不明である。

第5号土坑(SK - 05) (図7)

[位置・確認] W - 307グリッドに位置する。黒褐色土の落ち込みとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は不整円形を呈し、長径67cm×短径65cm、深さ17cmである。

[壁・底面] 壁は南東部を除きやや急に立ち上がり、底面は2個所に浅い掘り込みを確認できた。

[堆積土] 3層である。

[出土遺物] なし。

[時期] 時期決定の根拠に欠け、不明である。

第6号土坑(SK - 06) (図7)

[位置・確認] V・W - 309グリッドに位置する。黒褐色土の落ち込みとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は円形で、長径105cm×短径98cm、深さ9cmである。

[壁・底面] 壁は底面からやや開くように立ち上がる。底面は平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。

[出土遺物] なし。

[時期] 時期決定の根拠に欠け、不明である。

第7号土坑(SK - 07) (図7)

[位置・確認] V - 309グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は円形で、長径55cm×短径55cm、深さ21cmである。

[壁・底面] 壁は底面から緩やかに立ち上がり、底面にはやや起伏がある。

[堆積土] 6層に分層できた。

[出土遺物] なし。

[時期] 時期決定の根拠に欠け、不明である。

第8号土坑(SK - 08) (図7)

[位置・確認] O - 319グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は楕円形で、長軸94cm×短軸62cm、深さは14cmである。

[壁・底面] 南東壁がやや急に立ち上がる以外は緩やかに立ち上がっている。底面にはやや起伏が認められる。

[堆積土] 8層に分層できた。

[出土遺物] なし。

[時期] 時期決定の根拠に欠け、不明である。

第9号土坑(SK - 09) (図7)

[位置・確認] N - 319グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は楕円形で、長軸127cm×短軸90cm、深さは32cmである。

[壁・底面] 壁は底面より緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。

[出土遺物] なし。

[時期] 時期決定の根拠に欠け、不明である。

第10号土坑(SK - 10) (図8)

[位置・確認] P - 320グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は不整形円で、長径120cm×短径100cm、深さは11cmである。

[壁・底面] 壁は底面より南西壁を除き緩やかに立ち上がる。底面には多少起伏がある。

[堆積土] 1層である。

[出土遺物] なし。

[時期] 時期決定の根拠に欠け、不明である。

第11号土坑(SK - 11) (図8)

[位置・確認] Q - 320・321グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。

[重複] 第12号土坑と重複している。本土坑が古い。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈するものと思われ、南側は調査区外に伸びる。推定長軸250cm×推定短軸150cm、深さは66cmである。

[壁・底面] 壁は底面からやや開くように立ち上がる。底面は中央部に浅い掘り込みを有する。

[堆積土] 8層に分層できた。

[出土遺物] なし。

[時期] 時期決定の根拠に欠け、不明である。

第12号土坑(SK - 12) (図8)

[位置・確認] Q - 321グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。

[重複] 第11号土坑と重複している。本土坑が新しい。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈するものと思われ、南側は調査区外に伸びる。推定長軸180cm×推定短軸90cm、深さは51cmである。

[壁・底面] 壁は底面より緩やかに立ち上がる。底面は北側に掘り込みを有する。

[堆積土] 10層に分層できた。

[出土遺物] なし。

[時期] 時期決定の根拠に欠け、不明である。

第13号土坑(SK - 13) (図8)

[位置・確認] M - 318グリッドに位置する。黒褐色土の落ち込みとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は楕円形で、長軸103cm×短軸60cm、深さ15cmである。

[壁・底面] 壁は底面より緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。

[出土遺物] なし。

[時期] 時期決定の根拠に欠け、不明である。

第14号土坑(SK - 14) (図8)

[位置・確認] Y - 304グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は楕円形で、長軸75cm×短軸60cm、深さは10cmである。

[壁・底面] 壁は底面より緩やかに立ち上がる。底面には多少起伏がある。

[堆積土] 3層に分層できた。

[出土遺物] なし。

[時期] 時期決定の根拠に欠け、不明である。

第15号土坑(SK - 15) (図8)

[位置・確認] W・X - 305グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は円形で、長径54cm×短径48cm、深さは18cmである。

[壁・底面] 壁は底面よりやや急に立ち上がる。底面は平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。

[出土遺物] なし。

[時期] 時期決定の根拠に欠け、不明である。

第16号土坑(SK - 16) (図8)

[位置・確認] Y - 307グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は楕円形で、長軸68cm×短軸47cm、深さは18cmである。

[壁・底面] 壁は底面からやや開くように立ち上がり、底面にはやや起伏がある。

[堆積土] 3層に分層できた。

[出土遺物] なし。

[時期] 時期決定の根拠に欠け、不明である。

第17号土坑(SK - 17) (図8)

[位置・確認] W - 309グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は楕円形で、長軸93cm×短軸52cm、深さは13cmである。

[壁・底面] 壁は底面よりやや急に立ち上がる。底面は平坦であるが西側にブリッジを有する。

[堆積土] 2層に分層できた。

[出土遺物] なし。

[時期] 時期決定の根拠に欠け、不明である。

第18号土坑(SK - 18) (図8)

[位置・確認] W - 309・310グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は円形で、直径83cm、深さは12cmである。

[壁・底面] 壁は底面より緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。

[出土遺物] なし。

[時期] 時期決定の根拠に欠け、不明である。

第19号土坑(SK - 19) (図9)

[位置・確認] V - 311グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は楕円形で、長軸55cm×短軸45cm、深さは20cmである。

[壁・底面] 壁は西壁以外はやや急に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。

[出土遺物] なし。

[時期] 時期決定の根拠に欠け、不明である。

第20号土坑(SK - 20) (図9)

[位置・確認] V - 311グリッドに位置する。黒褐色土の落ち込みとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は楕円形で、長軸80cm×短軸50cm、深さは20cmである。

[壁・底面] 壁は底面からやや開くように立ち上がり、底面は北側に堀り込みを有する。

[堆積土] 5層に分層できた。

[出土遺物] なし。

[時期] 時期決定の根拠に欠け、不明である。

第21号土坑(SK - 21) (図9)

[位置・確認] S・T - 312・313グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は不整円形で、長径102cm×短径73cm、深さは14cmである。

[壁・底面] 壁は底面からやや開くように立ち上がり、底面は北側に堀り込みを有する。

[堆積土] 3層に分層できた。人為堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中より縄文土器の細片が2点と不定形石器が1点出土している。石器はスクレイパーと思われる。被熱資料である。

[時期] 出土遺物より縄文時代の土坑と思われ、土坑墓の可能性も考えられる。

第22号土坑(SK - 22) (図9)

[位置・確認] S - 311グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は円形で、長径53cm×短径45cm、深さは17cmである。

[壁・底面] 壁は底面からやや開くように立ち上がり、底面北西部にピットを有する。

[堆積土] 2層に分層できた。

[出土遺物] なし。

[時期] 時期決定の根拠に欠け、不明である。

第23号土坑(SK - 23) (図9)

[位置・確認] R・S - 316グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は不整円形で、長径76cm×短径70cm、深さは24cmである。

[壁・底面] 壁は底面からやや開くように立ち上がり、南東側にテラスを有する。底面は平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。

[出土遺物] なし。

[時期] 時期決定の根拠に欠け、不明である。

第24号土坑(SK - 24) (図9)

[位置・確認] Q - 315・316グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は楕円形で、長軸172cm×短軸115cm、深さは12cmである。

[壁・底面] 壁は底面から緩やかに立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。

[出土遺物] なし。

[時期] 時期決定の根拠に欠け、不明である。

第25号土坑(SK - 25) (図9)

[位置・確認] Q - 316・317グリッドに位置する。黒褐色土と暗褐色土の落ち込みとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は円形で、長径75cm×短径65cm、深さは15cmである。

[壁・底面] 壁は底面から緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。

[出土遺物] なし。

[時期] 時期決定の根拠に欠け、不明である。

第26号土坑(SK - 26) (図9)

[位置・確認] Z・A A - 303・304グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。

[重複] 第2号溝跡と重複している。本土坑の方が古い。

[平面形・規模] 平面形は円形で、長径164cm×短径150cm、深さは24cmである。

[壁・底面] 壁は底面からやや開くように立ち上がり、底面は平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。

[出土遺物] 覆土中より須恵器坏の口縁部片が1点、胴部の細片が1点、礫1点、鉄滓が1点出土している。図示し得たのは須恵器坏のみである。内外面にロクロ痕を明瞭に残している。

[時期] 平安時代の土坑と思われるが、詳細については不明。

第27号土坑(SK - 27) (図9)

[位置・確認] A B - 286グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。

[重複] なし。

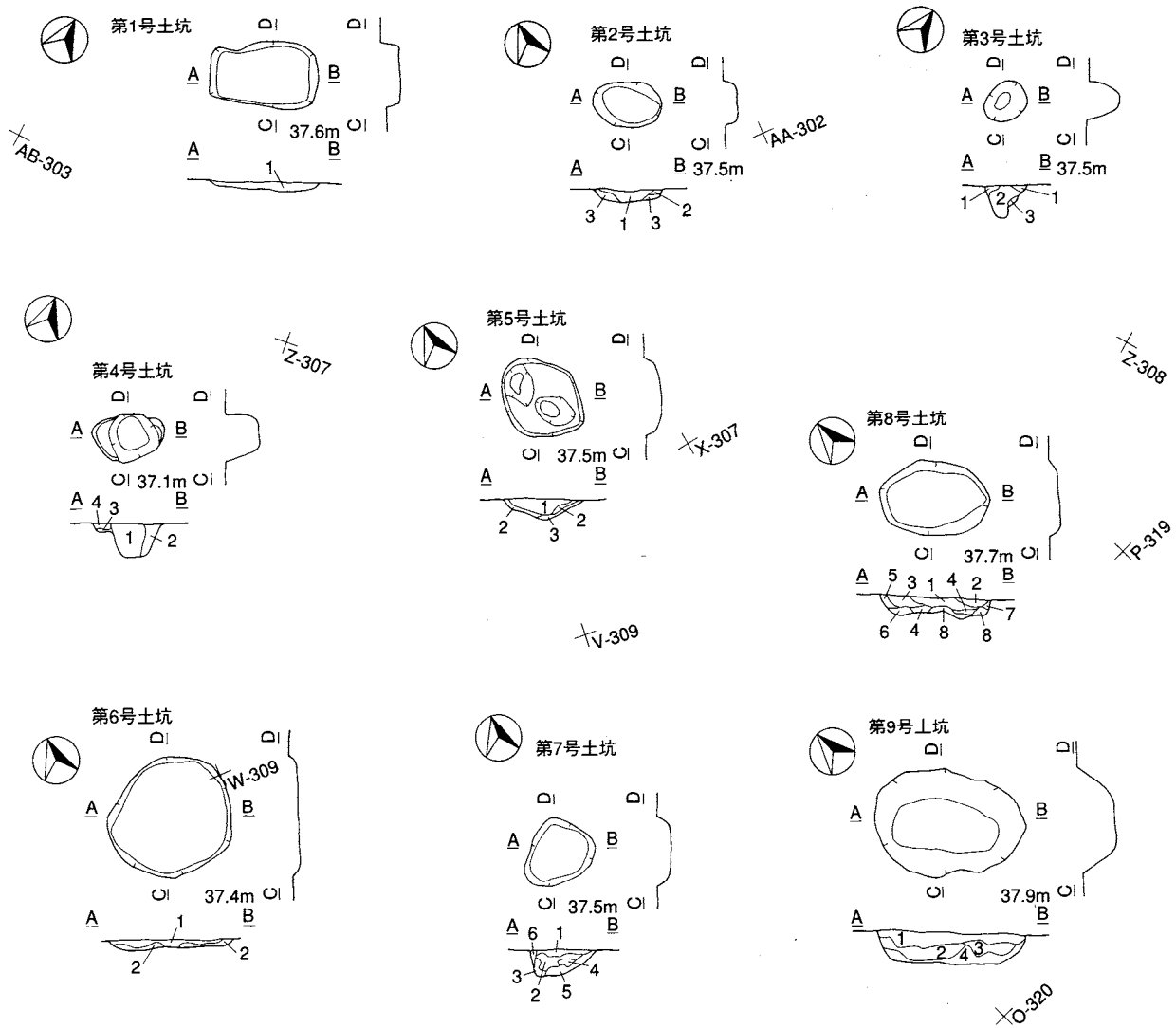
[平面形・規模] 平面形は長方形で、長軸59cm×短軸44cm、深さは36cmである。

[壁・底面] 壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 1層である。

[出土遺物] 礫が1点出土している。

[時期] 時期決定の根拠に欠け、不明である。



第1号土坑(SK-01)

1層 黒色土 10YR2/1 ローム粒(〜φ5mm)3%、黒褐色土(10YR2/3)3%混入。

第2号土坑(SK-02)

1層 黒色土 10YR2/1 木根少量混入。
2層 黒褐色土 10YR2/2
3層 黒褐色土 10YR3/2 B-Tm5%、炭化物粒(〜φ3mm)2%、木根微量混入。

第3号土坑(SK-03)

1層 黒色土 10YR1.7/1 B-Tm10%、シルト質ローム粒(〜φ30mm)10%混入、乾燥している。
2層 黒色土 10YR2/1 B-Tm2%、シルト質ローム粒(〜φ5mm)2%混入、硬く締まっている。
3層 黒色土 10YR2/1 シルト質ローム粒(〜φ15mm)30%混入。

第4号土坑(SK-04)

1層 黒色土 10YR1.7/1 ローム粒(〜φ3mm)1%、木根少量混入。
2層 黒色土 10YR1.7/1 ローム粒(〜φ15mm)15〜20%混入。
3層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒(〜φ1mm)1%混入。
4層 黒褐色土 10YR3/2主体 ローム粒(〜φ2mm)3%、暗褐色土(10YR3/3)少量、黄褐色土(10YR5/6)微量混入。

第5号土坑(SK-05)

1層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒(〜φ1mm)1%以下、暗褐色土(10YR3/4)少量混入。
2層 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒(〜φ2mm)2%、炭化物粒(〜φ3mm)2%混入。
3層 褐色土 10YR4/6 黄褐色土(10YR5/6)少量、細礫1%混入。

第6号土坑(SK-06)

1層 黒褐色土 10YR2/2 シルト質ローム粒(〜φ25mm)15%混入。
2層 暗褐色土 10YR3/3主体 シルト質ローム粒30%、黒褐色土(10YR2/3)混入(攪乱?)。

第7号土坑(SK-07)

1層 黒色土 10YR2/1 ローム粒(〜φ3mm)1%混入。
2層 黒色土 10YR1.7/1 ローム粒(〜φ10mm)7%混入。
3層 黒色土 10YR1.7/1主体 ローム粒(〜φ10mm)25%混入、脆い。
4層 黒色土 10YR1.7/1主体 褐色土(10YR4/6)との混合土、ローム粒(〜φ5mm)20%混入、脆い。
5層 黄褐色土 10YR5/6 黒色土(10YR2/1)10%混入。
6層 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒(〜φ3mm)2%混入。

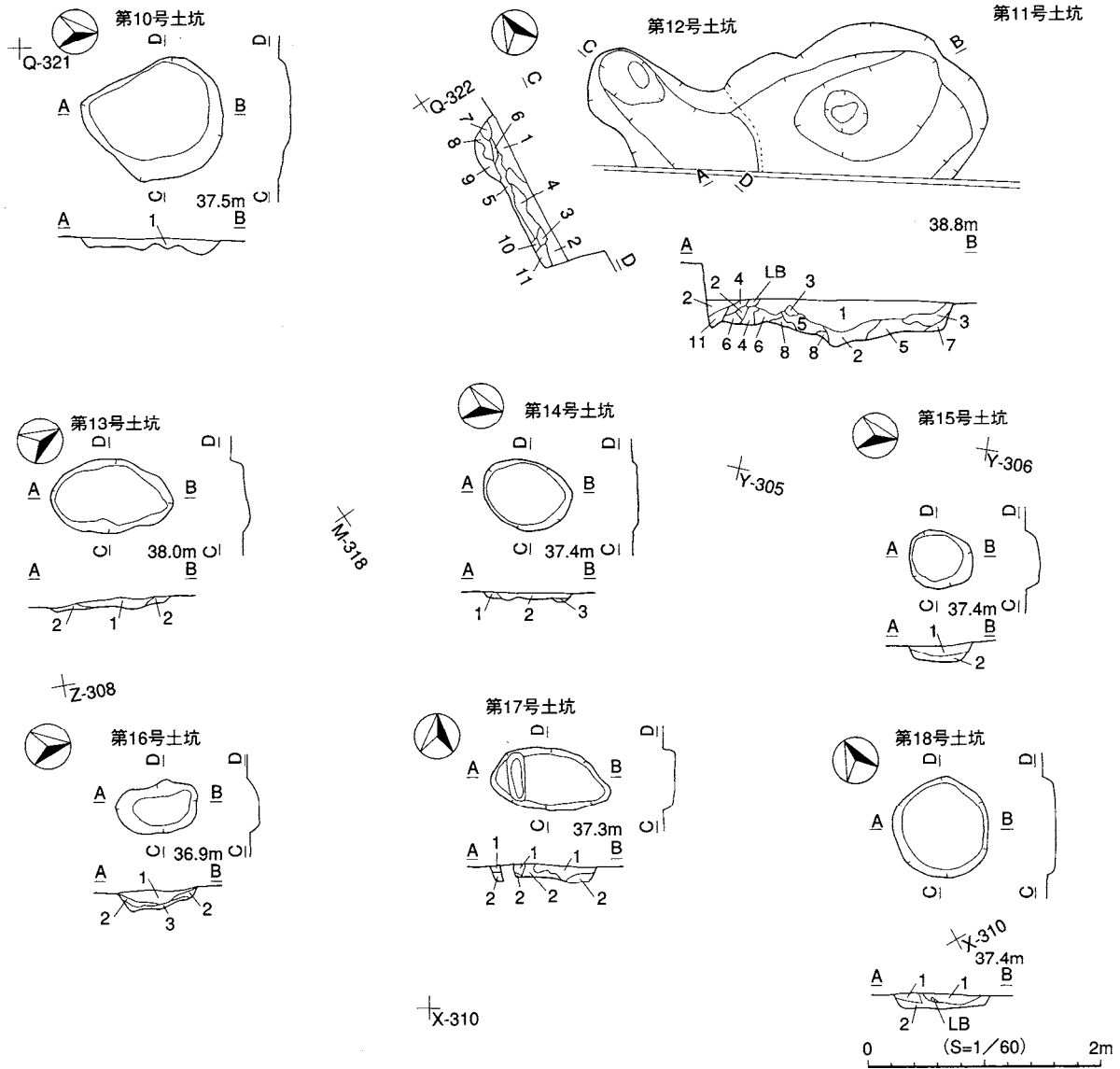
第8号土坑(SK-08)

1層 黒色土 10YR1.7/1 ローム粒(〜φ5mm)3%混入。
2層 黒色土 10YR2/1 ローム粒(〜φ1mm)2%混入、締まっている。
3層 黒色土 10YR2/1 ローム粒(〜φ10mm)10%混入。
4層 黒褐色土 10YR3/1 ローム粒(〜φ10mm)7%混入、脆い。
5層 黒褐色土 10YR3/2主体 シルト質のローム粒ブロック状に混入(〜φ20mm)。
6層 黒褐色土 10YR2/2 シルト質ローム粒(〜φ10mm)20%混入。
7層 黒色土 10YR1.7/1 ロームブロック(〜φ30mm)、ローム粒(〜φ10mm)2%混入。
8層 明黄褐色土 10YR6/6

第9号土坑(SK-09)

1層 黒色土 10YR1.7/1 ローム粒(〜φ10mm)1%以下混入。
2層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒(〜φ10mm)5%混入。
3層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒(〜φ5mm)10%、ロームブロック(φ30mm)1個、(φ50mm)2個混入。
4層 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒(〜φ5mm)15%混入。

図7 第1〜9号土坑



第10号土坑(SK-10)
1層 黒色土 10YR1.7/1 ローム粒(〜φ50mm)ブロック状に40%混入。

第11号土坑(SK-11)
1層 黒色土 10YR2/1 密度やや密。
2層 黒褐色土 10YR2/2 密度密 ローム粒ブロック状に5%混入。
3層 黒色土 10YR2/1 密度密 ローム粒(〜φ10mm)壁際に集中して5%混入。
4層 黒褐色土 10YR2/3 密度やや密 ローム粒(〜φ5mm)層下部に混入。
5層 明黄褐色土 10YR6/8と黒色土(10YR2/1)の混合土 密度密、硬度硬質 焼土粒5%混入。
6層 褐色土 10YR4/3と黒褐色土(10YR2/2)の混合土 密度やや密。
7層 黒色土 10YR2/1と明黄褐色砂質ローム(10YR6/8)の混合土 黒色土は密度粗、砂質ロームは密度密、硬度硬質。
8層 明黄褐色砂質ローム 10YR6/8 密度密、硬度硬質。

第12号土坑(SK-12)
1層 黒色土 10YR2/1 ローム粒(〜φ50mm)ブロック状に混入。
2層 黒褐色土 10YR3/1 密度一部粗 焼土粒極微量、ローム粒が全体に混入。
3層 黒色土 10YR2/1 密度やや密 ローム粒(〜φ10mm)20%混入。
4層 黒褐色土 10YR6/8と黒色土(10YR2/1)の混合土 密度密 ローム粒(〜φ1mm)層全体に混入。
5層 黒褐色土 10YR2/3 密度やや密 ローム粒(〜φ1mm)30%混入。
6層 黒褐色土 10YR3/1 ローム粒ブロック状に10%混入。
7層 暗褐色土 10YR3/4 密度密 ロームが層下部に帯状に10%混入。
8層 明黄褐色土 10YR6/8と黒色土(10YR2/1)の混合土 密度粗。
9層 におい黄褐色土 10YR4/8 ローム粒(〜φ10mm)5%混入 密度やや密。
10層 黄褐色砂質ローム 10YR5/8 密度密。

第13号土坑(SK-13)
1層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒(〜φ10mm)5%混入。
2層 黒褐色土 10YR3/2 ロームブロック(〜φ30mm)20%混入。

第14号土坑(SK-14)
1層 黒色土 10YR2/1 密度密 ローム粒(〜φ50mm)30%混入。
2層 黒褐色土 10YR2/2 密度密 ローム粒(〜φ20mm)40%混入。
3層 褐色土 10YR4/6と黒色土(10YR2/1)の混合土 密度やや密。

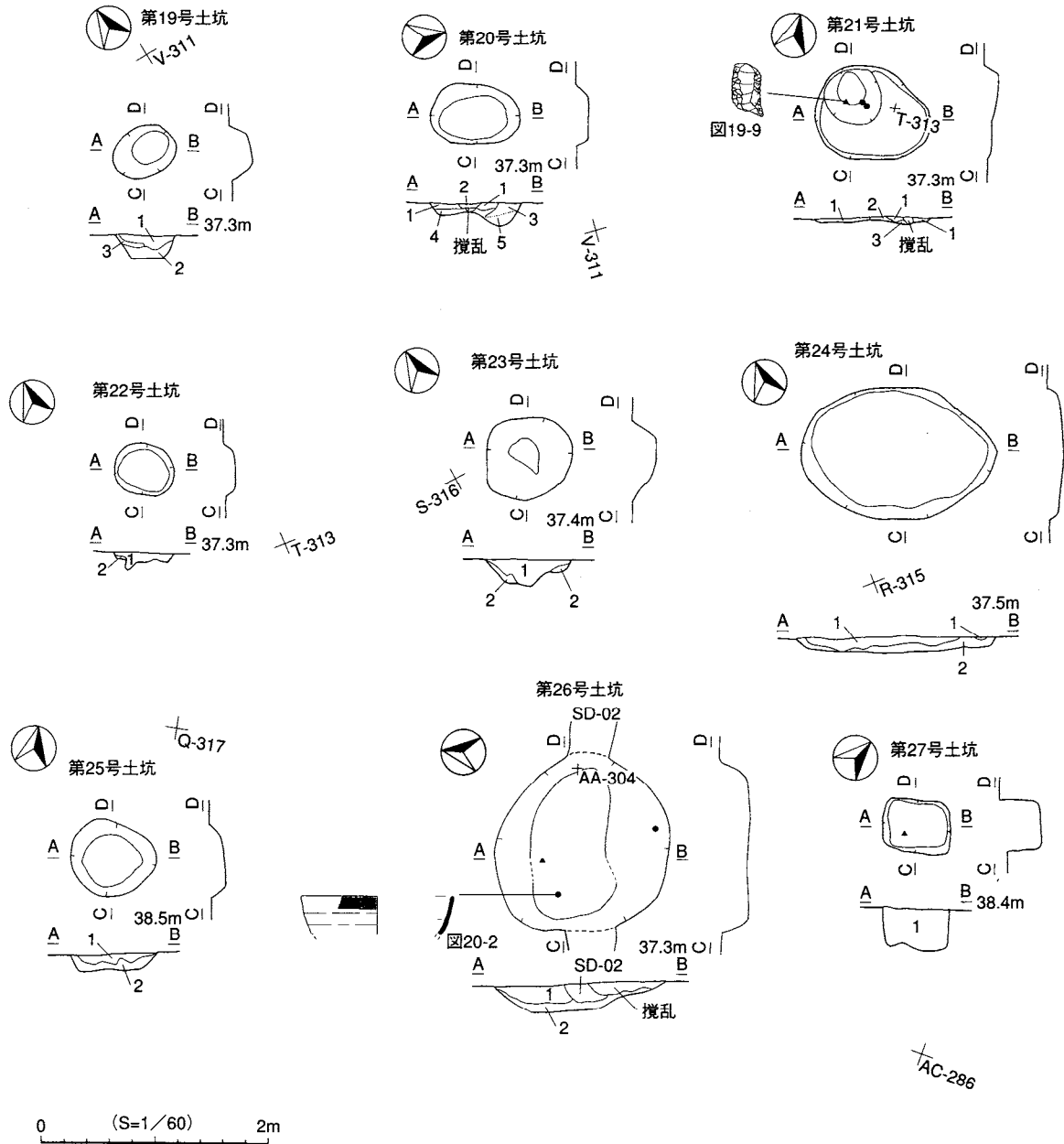
第15号土坑(SK-15)
1層 黒色土 10YR2/1 密度密 ローム粒(〜φ40mm)5%混入。
2層 黒褐色土 10YR2/2と黄褐色土(10YR5/6)の混合土 暗褐色土(10YR3/4)10%混入。

第16号土坑(SK-16)
1層 黒色土 10YR2/1 密度密 ローム(〜20φmm)10%、赤色粒子1%混入。
2層 黒褐色土 10YR2/1と明黄褐色土(10YR6/8)の混合土 密度やや密。
3層 明黄褐色砂質ローム 10YR6/8 密度やや密 黒色土(10YR1.7/1)15%混入。

第17号土坑(SK-17)
1層 黒色土 10YR2/1 密度密、硬度硬質 酸化鉄ブロック状(〜φ10mm)に5%、ローム粒(〜φ10mm)30%混入。
2層 暗褐色土 10YR3/4 密度密 黒色土(10YR1.7/1)10%、酸化鉄ブロック状に1%混入。

第18号土坑(SK-18)
1層 黒色土 10YR2/1 密度密 ローム粒(〜φ10mm)20%、赤色粒子1%混入。
2層 黒褐色土 10YR2/3 密度密 ローム粒(〜φ20mm)30%、黒色土(10YR2/1)20%、赤色粒子1%混入。
L.B 黄褐色土 10YR5/6

図8 第10～18号土坑



第19号土坑 (SK-19)

- 1層 黒色土 10YR1.7/1 密度密 ローム粒(〜φ15mm)層下部に10%混入。
- 2層 褐色土 10YR4/6と黄褐色土10YR5/8の混合土 密度密、硬度硬質。
- 3層 黒色土 10YR2/1 密度密、硬度硬質 ローム粒層全体に40%混入。

第20号土坑 (SK-20)

- 1層 黒褐色土 10YR2/2 密度密 ローム粒(〜φ10mm)10%混入。
- 2層 黒色土 10YR1.7/1 密度密、硬度硬質 ローム粒(〜φ5mm)1%混入。
- 3層 黒色土 10YR2/1 密度密 ローム粒(〜φ8mm)5%混入。
- 4層 黒褐色土 10YR3/1 密度密 ローム粒20%混入、一部根により密度粗。
- 5層 黒褐色土 10YR2/3 密度密 ローム粒(〜φ15mm)20%混入。

第21号土坑 (SK-21)

- 1層 黒色土 10YR2/1 密度密、硬度硬質 ローム粒(〜φ5mm)20%混入
- 2層 黒褐色土 10YR2/3 密度密、硬度硬質 ローム粒(〜φ15mm)10%、赤色粒子1%混入。
- 3層 黄褐色土 10YR5/6 密度密、硬度硬質 黒褐色土(10YR2/2)20%混入。

第22号土坑 (SK-22)

- 1層 黒色土 10YR1.7/1 密度密 ローム粒(〜φ10mm)1%混入。
- 2層 黒褐色土 10YR2/2と明黄褐色土10YR6/8の混合土 密度密。

第23号土坑 (SK-23)

- 1層 黒色土 10YR2/1 密度密 赤色粒子2%、ローム粒(〜φ10mm)1%混入。
- 2層 黄褐色土 10YR5/8と黒色土(10YR2/1)の混合土 密度やや密 ローム粒(〜φ50mm)30%、赤色粒子1%混入。

第24号土坑 (SK-24)

- 1層 黒色土 10YR1.7/1 密度密 黄褐色土(10YR5/4)10%、ローム粒(〜φ5mm)10%、赤色粒子1%混入。
- 2層 黒褐色土 10YR3/2 密度密、硬度硬質 ローム、灰褐色土(10YR4/2)層下部に15%、赤色粒子(〜φ2mm)5%混入、灰褐色土は粘性強。

第25号土坑 (SK-25)

- 1層 黒色土 10YR2/1 密度やや密 ローム粒(〜φ10mm)10%混入。
- 2層 黒色土 10YR2/1と黄褐色土(10YR5/8)の混合土 密度上層より密。

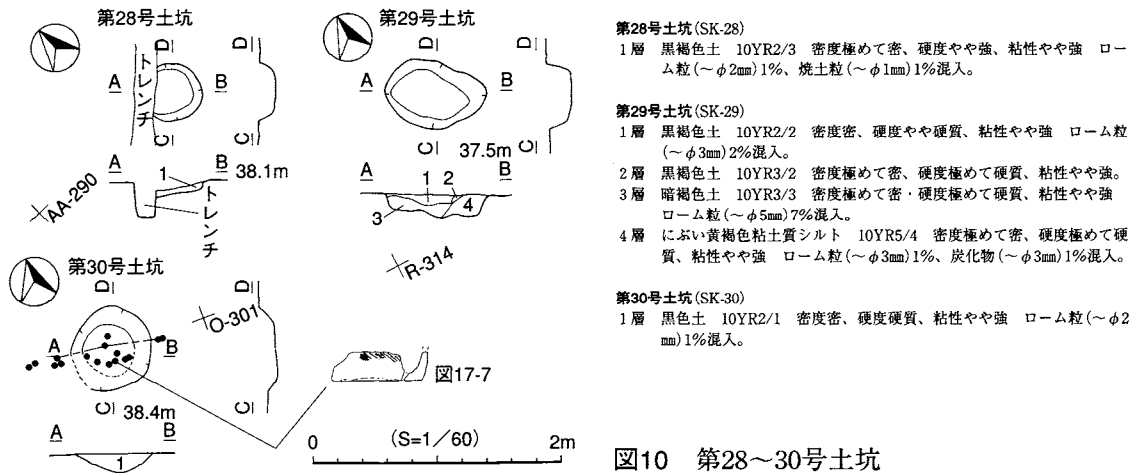
第26号土坑 (SK-26)

- 1層 黒色土 10YR2/1 密度粗、粘性強 草根多量、焼土粒子少量混入。
- 2層 黒褐色土 10YR3/2 密度密、粘性強 湿性に富む 鉄滓多量、ローム粒少量混入。

第27号土坑 (SK-27)

- 1層 黒色土 10YR1.7/1 密度密、硬度やや硬質、粘性やや強 ローム粒(〜φ5mm)2%混入。

図9 第19～27号土坑



第28号土坑 (SK - 28) (図10)

- [位置・確認] Z・A A - 289グリッドに位置する。黒褐色土の落ち込みとして確認した。
- [重複] 配管トレンチにより北西側が破壊されている。
- [平面形・規模] 平面形は楕円形で、長軸45cm×短軸37cm、深さは16cmである。
- [壁・底面] 壁は底面からやや開くように立ち上がり、底面は平坦である。
- [堆積土] 1層である。
- [出土遺物] なし。
- [時期] 時期決定の根拠に欠け、不明である。

第29号土坑 (SK - 29) (図10)

- [位置・確認] Q - 313グリッドに位置する。黒褐色土の落ち込みとして確認した。
- [重複] なし。
- [平面形・規模] 平面形は楕円形で、長軸82cm×短軸52cm、深さは20cmである。
- [壁・底面] 壁は北西壁を除き緩やかに立ち上がる。底面はかなり凸凹している。
- [堆積土] 4層に分層できた。
- [出土遺物] 覆土中より縄文土器片が2点出土しているが、かなり摩耗しており図示することはできなかった。
- [時期] 縄文時代の土坑と思われるが、詳細については不明。

第30号土坑 (SK - 30) (図10)

- [位置・確認] N・O - 301グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。
- [重複] なし。
- [平面形・規模] 平面形は円形で、長径67cm×短径53cm、深さは15cmである。
- [壁・底面] 壁は底面からやや開くように立ち上がる。底面は丸みを帯びている。
- [堆積土] 1層である。
- [出土遺物] 縄文土器の細片が12点出土している。図示し得たのは1点で底部付近の破片である。
- [時期] 出土遺物より縄文時代晩期の土坑と思われる。

(笹森)

2 溝跡

溝跡は合計5条検出された。この内、全ての遺構を切る第1号溝跡は、覆土中から肥料の空き袋が出土したり、ビニール管の一部が残存している部分も見受けられたため、現代の配管埋設溝と判断し、欠番とした。

第2号溝跡(SD-02)(図11)

[位置] Y～AA-297～304グリッドに位置する。AA-300～304グリッドまではほぼ東西方向に伸びるが、そこから東側では北東方向(N-25°-E)に約12mにわたって検出された。

[確認] 第Ⅲ～Ⅳ層上面で黒褐色土、黒色土の落ち込みとして確認した。特に東側では、埋没沢堆積土部分に掘り込まれていた。確認面が黒色土であったため、確認は困難であった。最終的に第Ⅴ層まで少しずつ掘り下げたが、遺構確認面とした第Ⅴ層への掘り込みが浅く、Y-298グリッドより先では検出できなかった。

[重複] 第26号土坑と重複しており、本遺構の方が新しい。

[規模] 上面幅32～56cm、底面幅20～42cm、深さ0～25cmで、東側ほど掘り込みが浅くなっている。

[堆積土] 1～3層に分層された。基本的に基本層序第Ⅲ層が母材となっている。覆土中に砂層など水の存在を示す堆積は確認されなかった。

[壁断面・底面] 壁断面形態は角の丸くなった逆台形を呈し、約75°の傾斜で底面から立ち上がる。溝底は比較的平坦である。検出された北東端と溝底面に1箇所ずつ小ピットが検出されたが、本遺構との関連は不明である。

[出土遺物] 遺物の出土は見られなかった。

[小結] 旧沢地形堆積土は白頭山火山灰(B-Tm)降下後に堆積している。また第26号土坑は平安時代の須恵器坏等が覆土から出土している。本遺構はその両方の覆土を切って構築していることから、10世紀前半以降に構築時期が求められよう。

(浅田)

第3号溝跡(SD-03)(図12)

[位置] O～R-320グリッドに位置する。ほぼ南北方向に約9m程直線的に伸びる。北側は東に向かって(N-75°-E)折れ曲る。長さは1m程である。南側は調査区外へ伸びており、詳細は不明である。

[確認] 第Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。

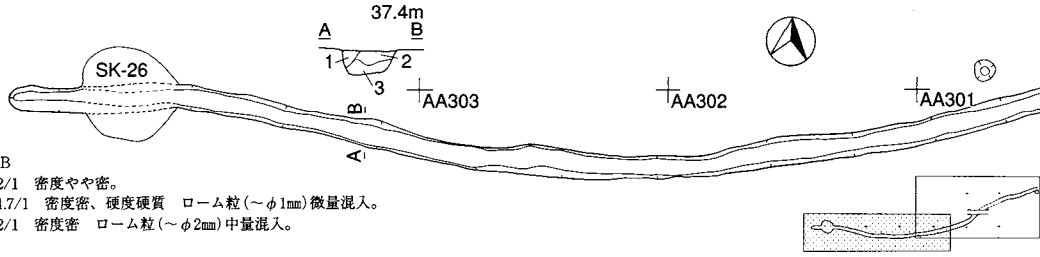
[重複] 認められない。

[規模] 上面幅26～44cm、底面幅14～30cm、深さ1～14cmを測る。

[堆積土] 基本層序第Ⅲ層が母材と考えられる黒色土の単一層であった。水の存在を示す堆積層は確認されなかった。

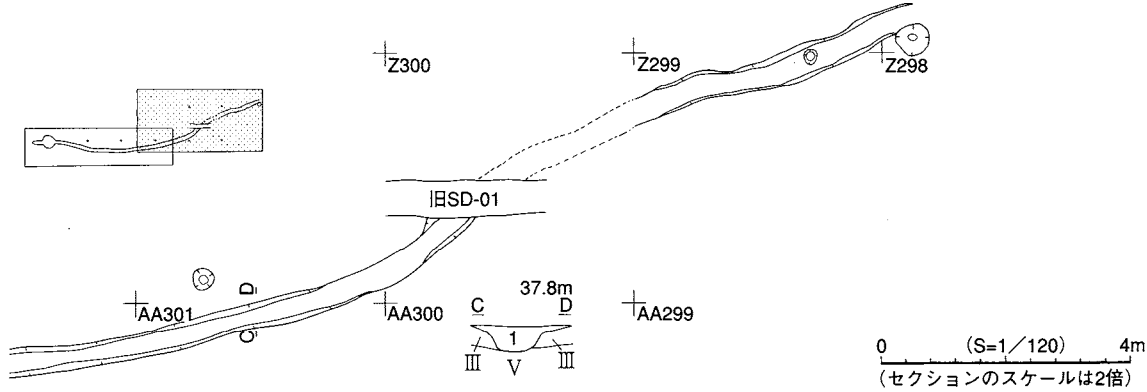
[壁断面・底面] 壁断面形態は浅い皿形を呈し、約35°の傾斜で底面から立ち上がる。溝底は比較的平坦に構築され、ピット等の付帯施設は検出されなかった。

第2号溝跡



第2号溝跡 (SD-02) A-B

- 1層 黒色土 10YR2/1 密度やや密。
- 2層 黒色土 10YR1.7/1 密度密、硬度硬質 ローム粒(〜φ1mm)微量混入。
- 3層 黒色土 10YR2/1 密度密 ローム粒(〜φ2mm)中量混入。



第2号溝跡 (SD-02) C-D

- 1層 黒褐色土 10YR2/2 密度密、硬度やや硬質、粘性やや強 ローム粒(〜φ7mm)3%、焼土粒(〜φ3mm)2%混入。

図11 第2号溝跡

[出土遺物] 遺物の出土は見られなかった。

[小結] 構築時期は決定の根拠に欠け不明である。

(浅田)

第4号溝跡 (SD - 04) (図12・13)

[位置] 現有する農道の東側部分ではY～AF - 284～287グリッド、西側部分ではAE～AG - 288～291グリッドにかけて検出された。北側調査区壁からZ - 285グリッド付近まで緩やかに湾曲しており、そこから南西方向に若干の蛇行をしながらAE - 287グリッドで農道と接する。農道を挟んで西側は、AE - 288から調査区壁にあたるAG - 291グリッドまでほぼ一直線である。長さは約13mを測る。

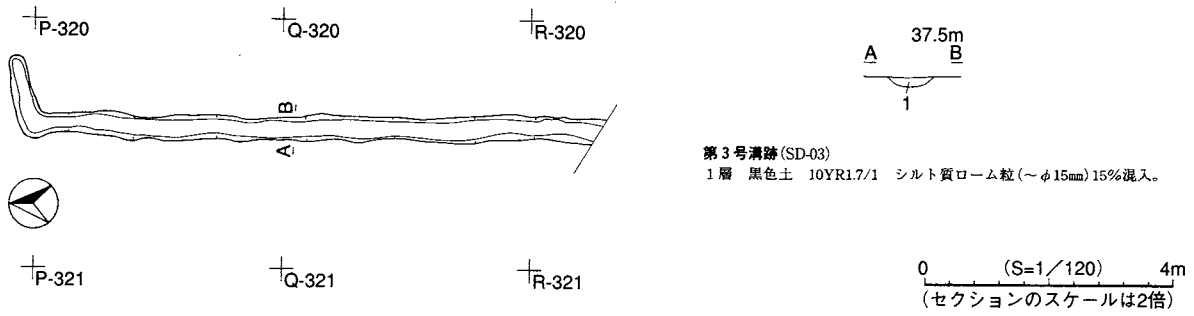
[確認] 当初この部分は調査対象範囲外であったため、排土仮置き場として利用する予定であった。念のためトレンチを入れ確認をしたところ、基本層序第Ⅲ～Ⅳ層上面で黒色～黒褐色土の落ち込みとして確認されたため、トレンチを拡張し、全体像の把握に努めた。

[重複] AG - 291グリッドで第5号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

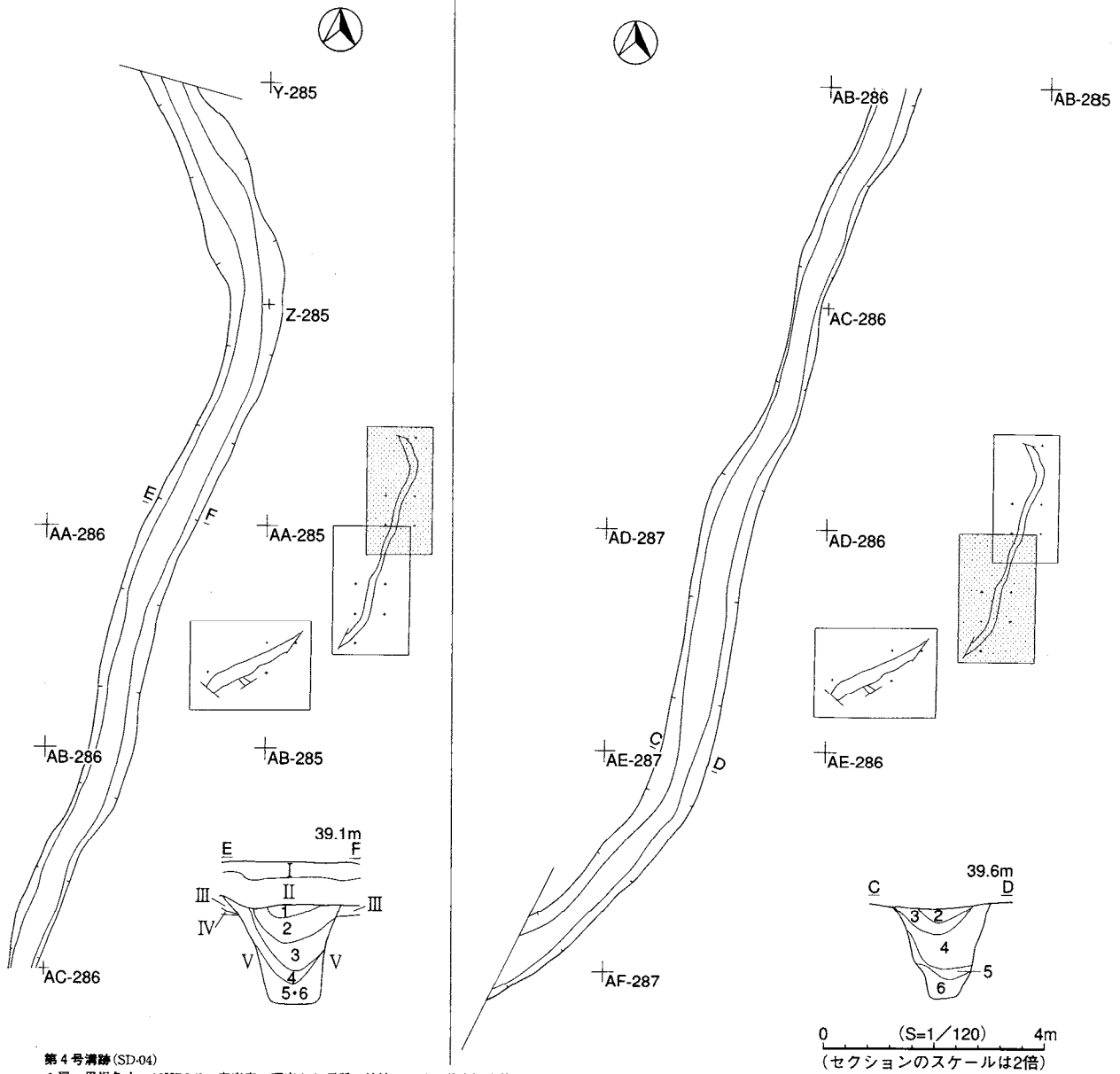
[規模] 上面幅50～180cm、底面幅25～60cm、深さ40～88cmを測る。深さの計算は基本層序第Ⅴ層からの計算であるため、現地表面からでは1mを超える。

[堆積土] 6層に分層された。1層に白頭山火山灰(B-Tm)が確認されたが、1層の母材となっている基本層序第Ⅲ層にはB-Tmが混入している部分も存在する。本層もそのような土が流入したものと思われる。2～4層も基本層序第Ⅲ層を母材にしているものと思われる。5、6層はいずれも水の影響を強く受けて堆積した層と認められた。基本層序第Ⅵ層を掘り込んでおり、調査時も第Ⅵ層上面か

第3号溝跡



第4号溝跡



- 1層 黒褐色土 10YR3/2 密度密、硬度やや硬質、粘性やや強。基本層序第Ⅲ層母材のB-Tm包含(混入したと思われる)層。
- 2層 黒色土 10YR2/1 基本層序第Ⅲ層が窪地に流入、堆積した層。
- 3層 黒褐色土 10YR2/2 密度やや密、硬度やや硬質、粘性強 基本層序第Ⅲ層にローム(〜φ5mm)均一に20%混入。
- 4層 黒色土 10YR2/1 密度やや密、硬度やや硬質、粘性強 基本層序第Ⅲ層にローム混入(両端50%、下部10%)。
- 5層 灰黄褐色砂質粘土 10YR5/2 密度密、硬度やや硬質、粘性強 基本層序第Ⅲ〜Ⅴ層崩落土が水の影響を受け堆積した層。
- 6層 灰白色粘土 5Y7/2 基本層序第Ⅵ層崩落土が水の影響を受け堆積した層。

図12 第3・4号溝跡

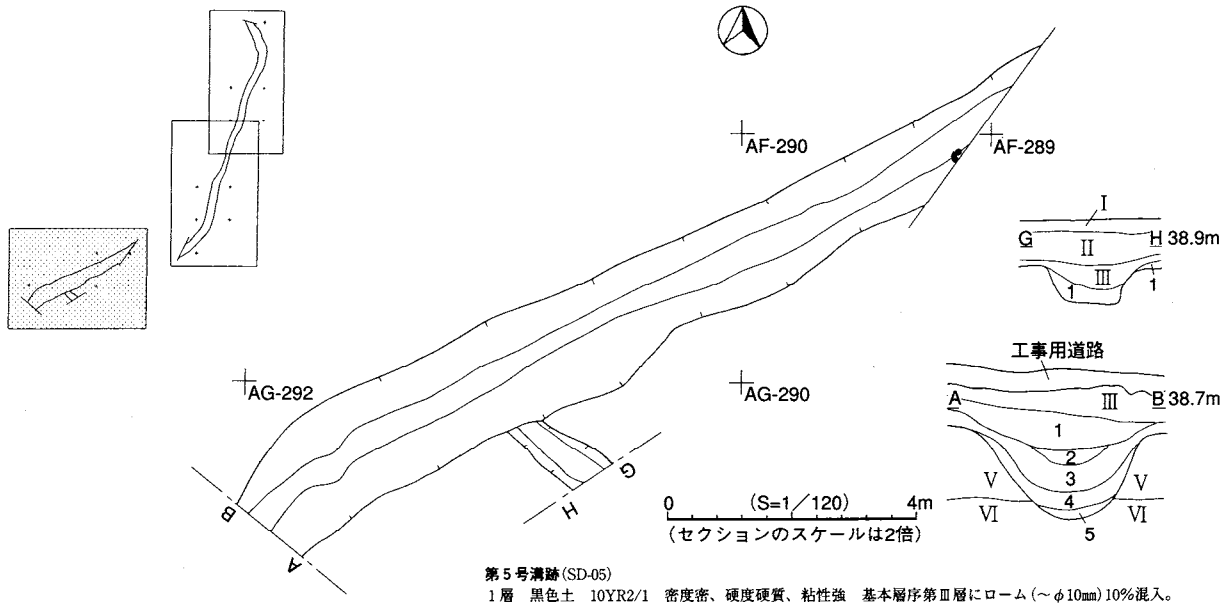


図13 第4・5号溝跡

らの湧水で常に帯水している状況であった。

[壁断面・底面] 壁断面形態は逆台形状を呈し、平均して約70°の傾斜で立ち上がる。底面付近では90°になり、箱型に近い部分も存在する。溝底はほぼ平坦に構築され、溝内からピット等の付帯施設は検出されなかった。

[出土遺物] 覆土中からは土器の細片が出土しているが、摩耗が激しく、図示や時期決定ができるようなものは一切見られなかった。

[小結] 現有の農道に阻まれ、全掘することはできなかった。両端も調査区外に伸びており詳細は不明である。しかし北側端部を延長してみると、平成9年度にA区から検出された第1号溝跡(SD-01)が存在する(図6)。この遺構と断面形態、堆積土、上面幅などが酷似しており、両溝跡は同一遺構であると思われる。しかし、今回の情報をあわせても、これらの溝がどのような用途に用いられたのか不明である。何らかの意図があって台地を区切っていたものと考えられるが、このことに関しては本遺跡周辺の調査事例の増加を待ちたい。構築時期に関しては1層に白頭山火山灰(B-Tm)が混入しているが、基本層序第Ⅲ層に混入していたものが流入しただけであれば、構築時期比定は困難である。

(浅田)

第5号溝跡(SD-05)(図13)

[位置] AG-290グリッドに位置する。北西方向(N-42°-W)に約1.6mで第4号溝跡と重複する。南東方向は調査区域外に続いている。

[確認] 基本層序第V層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。

[重複] 第4号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

[規模] 上面幅50～70cm、底面幅30～40cm、深さ17～28cmを測る。

[堆積土] 基本層序第Ⅲ層が母材と考えられる、黒色土の単一層であった。

[壁・底面] 断面形態は約60～80°で立ち上がる傾斜のきつい逆台形を呈する。溝底はほぼ平坦に構築され、溝内にピット等の付帯施設は検出されなかった。

[出土遺物] 遺物の出土は見られなかった。

[小結] 構築時期は決定の根拠に欠け不明である。

(浅田)

3 焼土・火山灰集中区

第1号焼土・火山灰集中区(SX-01)(図14)

[位置] 旧沢地形の内部にあたる、W～A A - 292～300グリッドにかけて検出された。北東から南西方向に伸びる旧沢地形の北側斜面にはほぼ該当する。

[確認] 旧沢地形覆土である基本層序第Ⅲ層の落ち込みが帯状に拡がることが確認された。さらに精査を進めると第Ⅲ層内、第Ⅳ・Ⅴ層上面で焼土及び白頭山火山灰(B-Tm)が検出された。

[重複] 第2号溝跡が西側に構築されており、旧沢地形覆土内に構築されているが、焼土・B-Tmとの関係は不明である。

[規模] 1ブロックの面的な広がりさはほど大きくなく、最大で148×96cmを測る。

[堆積土] 旧沢地形を全体的に基本層序第Ⅲ層が覆っており、その堆積前、堆積中に焼土及びB-Tmが堆積している。焼土とB-Tmがそれぞれ交互に折り重なるようにして堆積している部分も存在した。焼土は確認された場所で形成されたものではなく、二次的に堆積しているような状況であった。B-Tmに関しても同様である。

[出土遺物] 縄文土器等が出土しているが、旧沢地形覆土である基本層序第Ⅲ層堆積時に流入したものとと思われるため、焼土・B-Tmとの関連は無いものと思われる。

[小結] 旧沢地形内に堆積した多量の焼土と白頭山火山灰は、旧沢地形が基本層序第Ⅲ層の流入によって埋没する以前、もしくはその最中に、何らかの要因によって本遺構内に堆積している。その要因は自然堆積と人為堆積の二種類に分けられる。一つは基本層序第Ⅲ層が完全に自然堆積であり、その覆土と共に流入したと考えることが出来る。旧沢地形周辺で確認された風倒木痕の中にも焼土およびB-Tm火山灰が検出されている。堆積状況は覆土中にレンズ状に堆積、または最上層の微窪地に、いずれも流入した状況であった。いずれの例も自然堆積と見ることができる。一方、焼土とB-Tmの分布を見てみると北側斜面にのみ集中しており、底面やその他の部分では希薄である。仮に自然堆積だとするならば、底面やその他の部分に流入していないことは不自然に思えるし、焼土と火山灰が混ざり合うことなく重なり合って堆積することや、焼土、B-Tmの確認範囲一つ一つが比較的狭く、散在せずに纏まって検出されることも説明が困難となる。これらを何らかの要因によって人々が集めた焼土、B-Tmをまだ窪地であった旧沢地形に投げ込んだと仮定すれば、説明は容易になるのではないだろうか。現段階では想像の域を越えないため、今後の類例増加に期待したい。いずれにせよ、本遺構はB-Tm降下時にはまだ完全に埋没していないことは想定できよう。

(浅田)

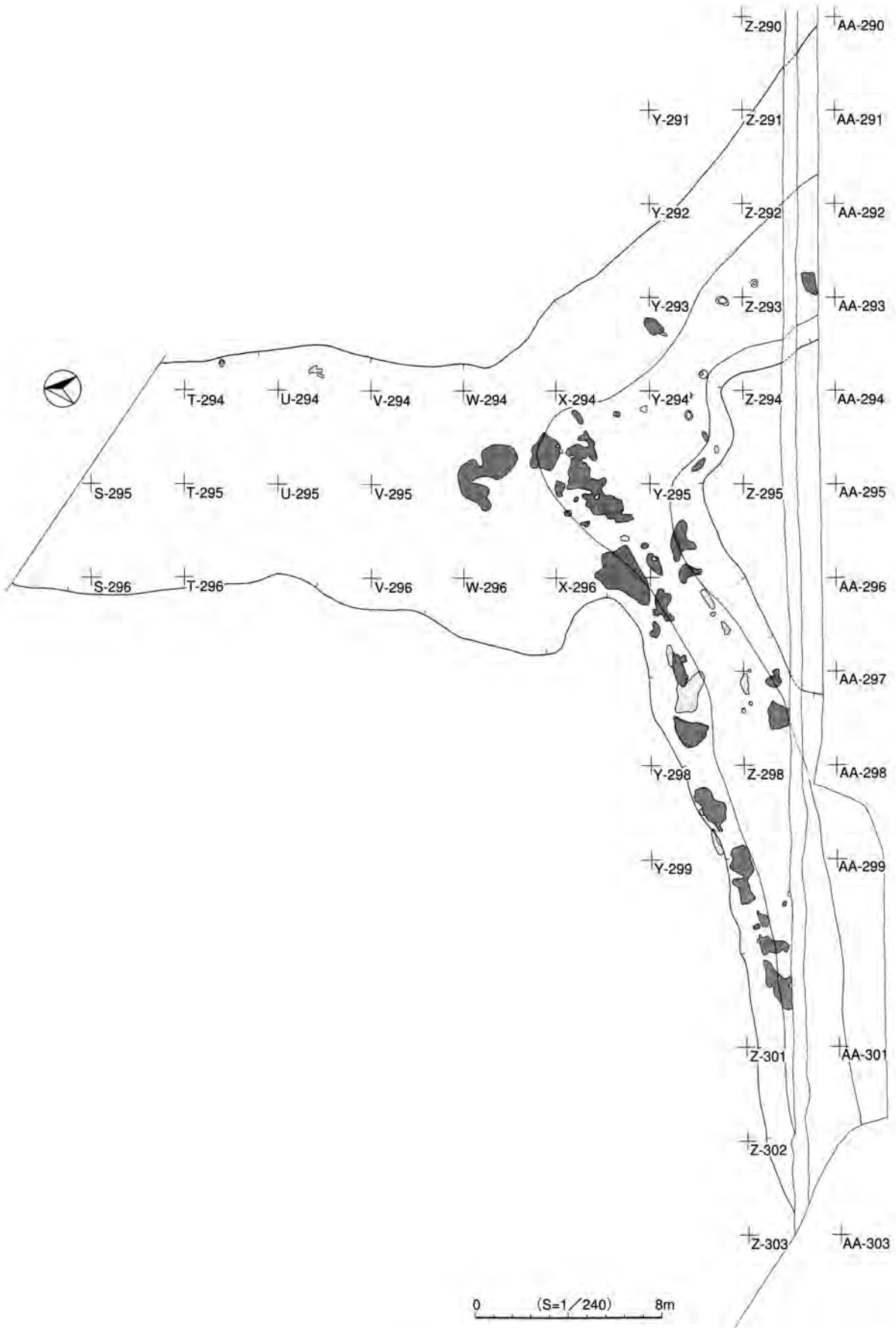


図14 焼土・火山灰集中区

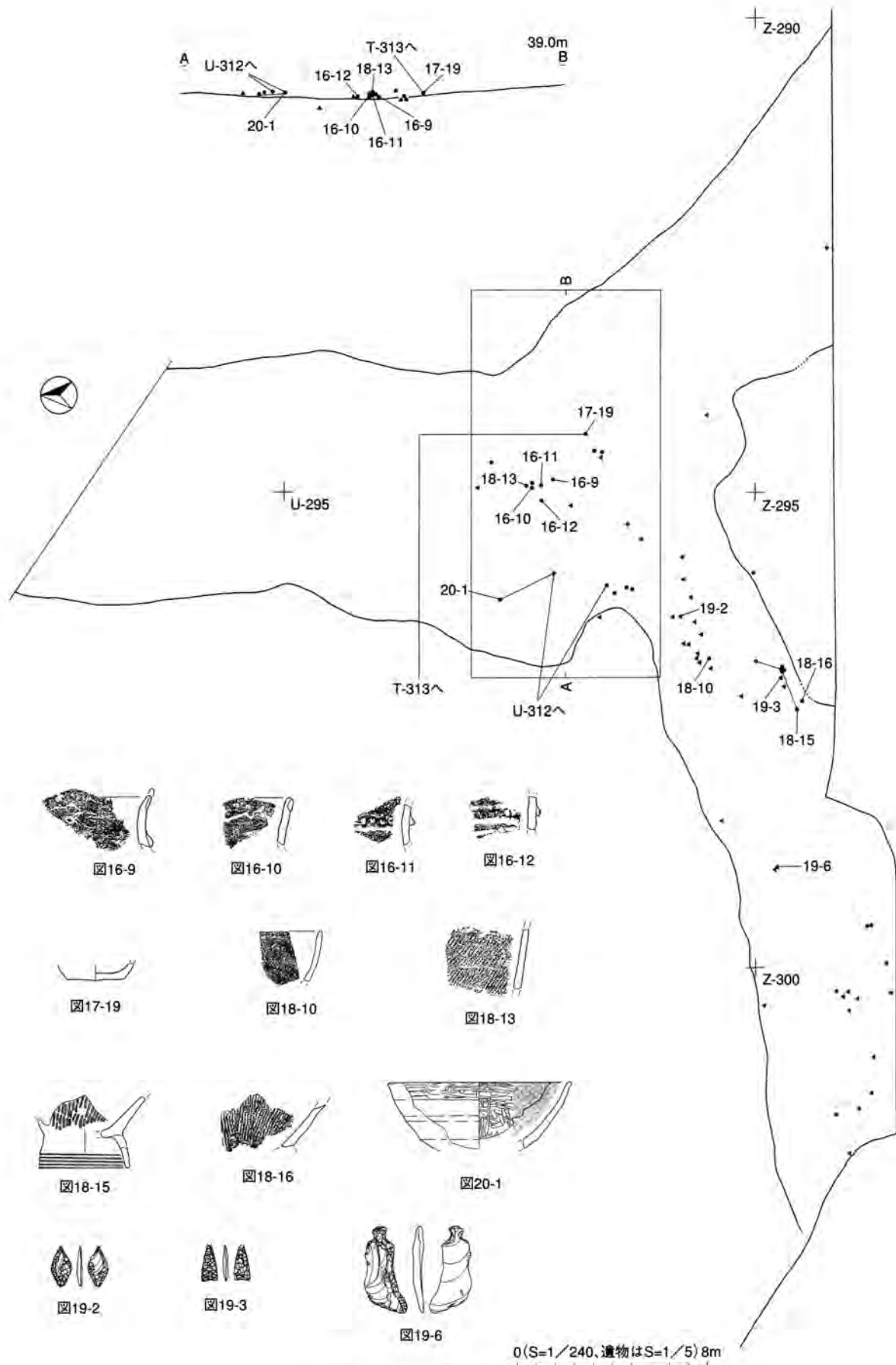


図15 旧沢地形遺物出土状況

第2節 出土遺物

1 縄文土器

縄文時代所産の土器は前期から晩期まで出土している。遺構内からの出土は極僅かで、遺構外からの出土が大半を占める。遺存状況は良好ではなく、大半が小破片での出土である。接合状況は後述するが、若干の接合を見たものの完全な復元を行えたものは無かった。従って、基本的に口縁部が残存する破片を中心に図化を行い、総数62点を提示した。分類は、A区の報告では出土が確認されなかった項目も存在することから、今回出土しているものだけで行った。そのため以下に今回使用した分類と、()内にA区の報告で用いた分類について記述し、対応させた。

- | | | | |
|------------|--------|-----|-------------------------|
| 第I(Ⅱ)群土器 | 縄文時代前期 | 第1類 | 円筒下層 a～b 式に比定される土器(Ⅱ-3) |
| | | 第2類 | 円筒下層 d 式に比定される土器(Ⅱ-4) |
| 第II(Ⅲ)群土器 | 縄文時代中期 | 第1類 | 円筒上層 a 式に比定される土器(Ⅲ-1) |
| | | 第2類 | 円筒上層式に比定される土器 |
| 第III(Ⅳ)群土器 | 縄文時代後期 | 第1類 | 中期末～後期初頭に比定される土器(Ⅳ-1) |
| | | 第2類 | 十腰内 I 式に比定される土器(Ⅳ-2) |
| | | 第3類 | 粗製土器 |
| 第IV(V)群土器 | 縄文時代晩期 | 第1類 | 晩期中葉～後葉の土器(V-2) |
| | | 第2類 | 粗製土器(V-4) |

第I群土器

第1類(図16-1,2)概ね前期中葉の円筒下層 a～b 式に比定される。出土量はA区では比較的多かったが、今回は全体量が少ないこともあり、2点を提示するにとどまった。図16-1の口縁部施文には結節回転文が施されている。口唇部断面形は丸く、胎土には繊維を多量に混入する。内面の撫、磨き調整は丁寧に行われている。図16-2は底部資料であるが、摩滅が進行しており、表面観察は不可能であった。この傾向は図示できなかった該当時期の土器に共通する。

第2類(図16-3)前期後葉の円筒下層 d 式に比定される。胴部破片の1点のみ図示可能であった。胴部に単軸絡条体第1類Rを縦位施文しており、内面は撫調整となっている。

第II群土器

第1類(図16-4)円筒上層 a 式に比定される。図16-4は大きく開く口縁を有し、口唇部をまたぐように2つ折りの隆帯を貼り付けている。口縁部と胴部の屈曲点には横方向に粘土紐が貼り付けられ区画を形成する。区画内を鋭利な棒状工具で連続刺突を施している。区画を作る粘土紐は蕨状に巻かれており、上部に刺突が施されている。出土時は良好な遺存状況であったが、水洗い後に外表面の剥離が進み、器表面荒れが著しい。内面は磨きが施される。

第2類(図16-5)胴部破片のみで時期細分が不可能なものである。外面に結束第1種羽状縄文が施される。内面は撫と磨きが施されている。

第Ⅲ群土器

第1類(図16-6～12) 中期末から後期初頭に比定される。図16-6～9は単軸絡条体第1類Rを口縁部では横位に、その下部では斜位に施文している。胎土は非常に類似しており、同一個体と判断できる。焼成は良好でかなり硬質に仕上がっている。前回調査区の報告で第Ⅵ群、時期比定の困難なものとして分類したものや、当遺跡と隣接する隈無(6)遺跡で単軸絡条体第1類を縦位施文するものが確認されている。今回出土したものと施文方向が若干異なるものの、これらも同様の時期に入るものと思われる。図16-9、10、図16-11、12はそれぞれ胎土が似ており、同一個体の可能性が高いが、若干所産時期が古くなる可能性がある。図16-9、10は波状口縁の頂部で、口唇部は折り返している。図16-10には若干だが隆帯の貼付が見られる。図16-12は胴部破片で、横方向に隆帯を巡らし、その上面を小さな竹管状工具による連続刺突が施される。

第2類(図16-13～21) 十腰内I式に比定される。A区では非常に多くの出土例を見たが、本地区では割合的に少なくなっている。口唇部は強いナデによって平坦面が作られ、捲れあがった粘土を胴部方向に押し付けて調整している。文様は口縁部に横走沈線、胴部に斜格子目沈線文が施文される。その他の文様は確認できなかった。また、図16-16、19では文様が確認できなかったが、胎土等からこの時期に属するものと思われる。A区では大きく11種の文様が確認されている。B区では出土量が減少しているとはいえ、文様に偏りが見られると言える。

第3類(図16-22～29、図17-1～14) 胎土、焼成等から中期末～後期初頭の所産と思われる粗製土器であるが、十腰内I式期も含まれている可能性がある。図16-22～27は口縁部から胴部にかけて滑らかな曲線を持つ。器厚は比較的薄い。図16-28、29は施文縄文の節が粗く、若干所産時期が古くなる可能性がある。図17-1、2は胎土が酷似する。図17-2には底面に網代痕が確認できる。図17-5は下部に浅い横走沈線が施文されている。図17-7～10は底部破片で、図17-10は底部内面に調整に使用した工具痕が多数確認される。図17-11～14は胎土が非常に類似している。また焼成は良好で硬質である。しかし、図17-11～13は口唇部形態や頸部の屈曲が若干異なっている。特に図17-11は口縁部の屈曲は大きい口唇部の外反が少なく、胴部が大きく張るという余り類例を見ない器形を持つ。外面施文は単節LRの縦位施文となっている。本群資料は基本的に外傾接合となっている。

第Ⅳ群土器

第1類(図17-15～19、図18-1～10) A区では晩期前葉から後葉まで出土していたが、B区ではA区で最も出土量の多かった中葉から後葉にかけての資料のみ出土が確認されている。図17-17、18は台付鉢の台部である。脚部は大きく開き、外面は丁寧に磨かれている。図17-15、16、図18-1～4、6～9は台付鉢として提示しているが、鉢の可能性も含まれている。胴部は基本的に横走沈線が施文され、口唇部や胴部に突起が作出されるものが多い。胎土粒子は細かく、焼成も良好なものが多い。図18-8、9は沈線で区画された部分が工字文になるとと思われる。図18-10は無文の鉢と思われる。

第2類(図18-11～14) B区の粗製土器は、A区と異なり第Ⅲ群土器に属するものが多く、本類の出土量は少ない。出土状況がほぼ遺構外出土のみであることから、精製、粗製土器の共存関係を捉えることができず、時期比定は困難である。しかし本区では1類のみ確認されていることから、この時期の所産である可能性が高い。縄文施文は単節LRで、節が細かいものが多い。図18-5は口唇部に突起が作出されているが、胴部に縄文施文しか施されていないため、本類に分類した。図18-11の口唇部は

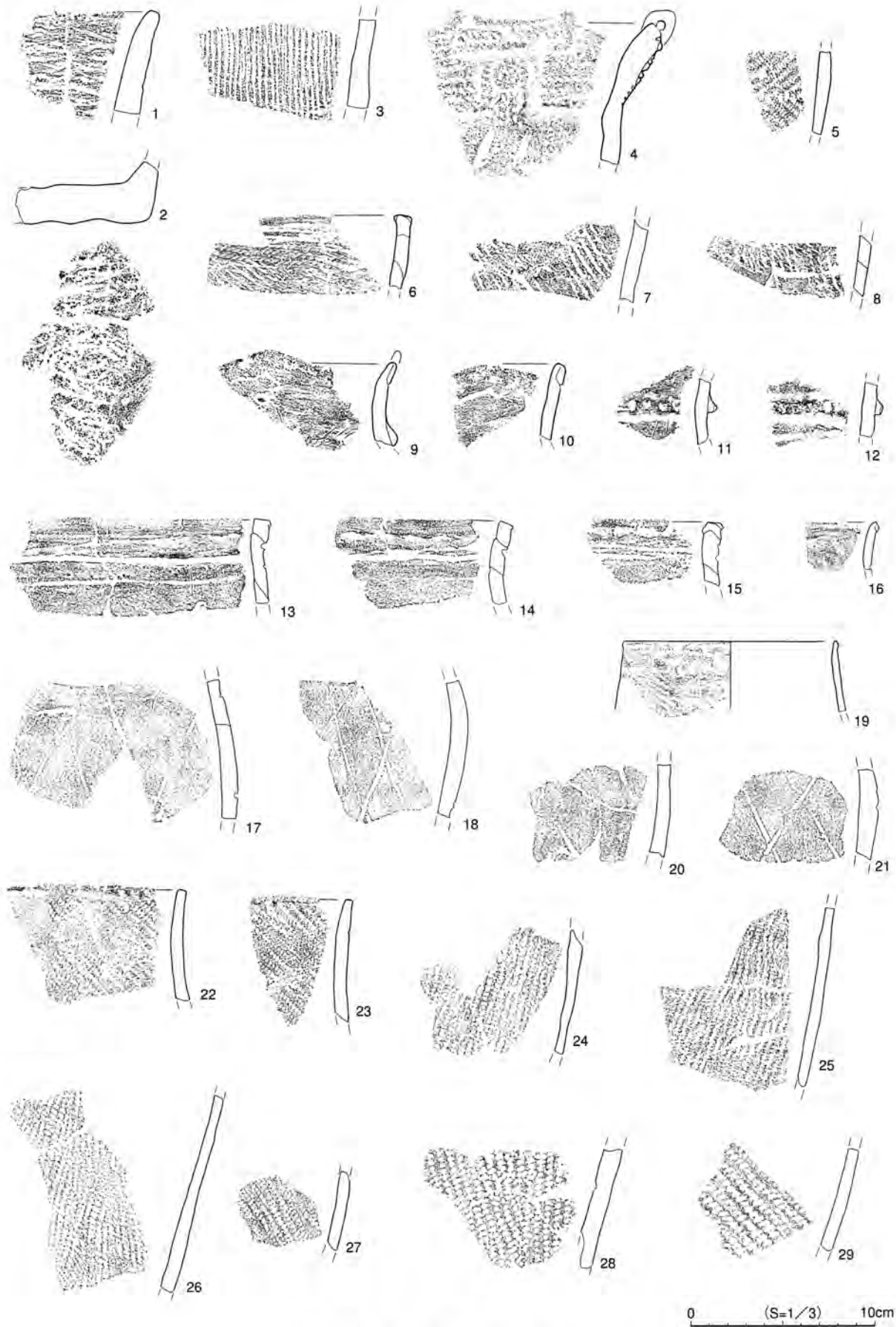


図16 出土遺物 縄文土器 1

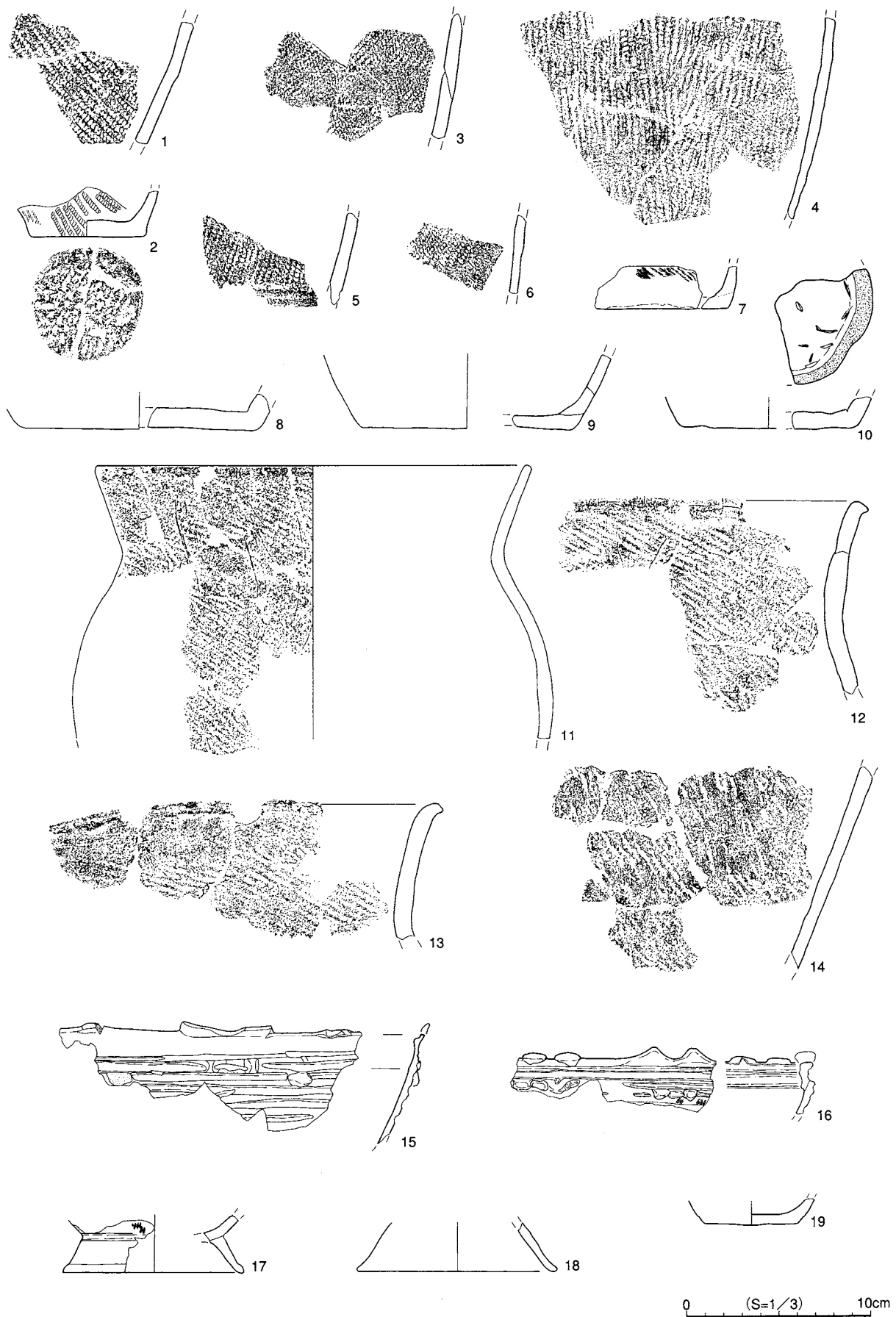


図17 出土遺物 縄文土器 2

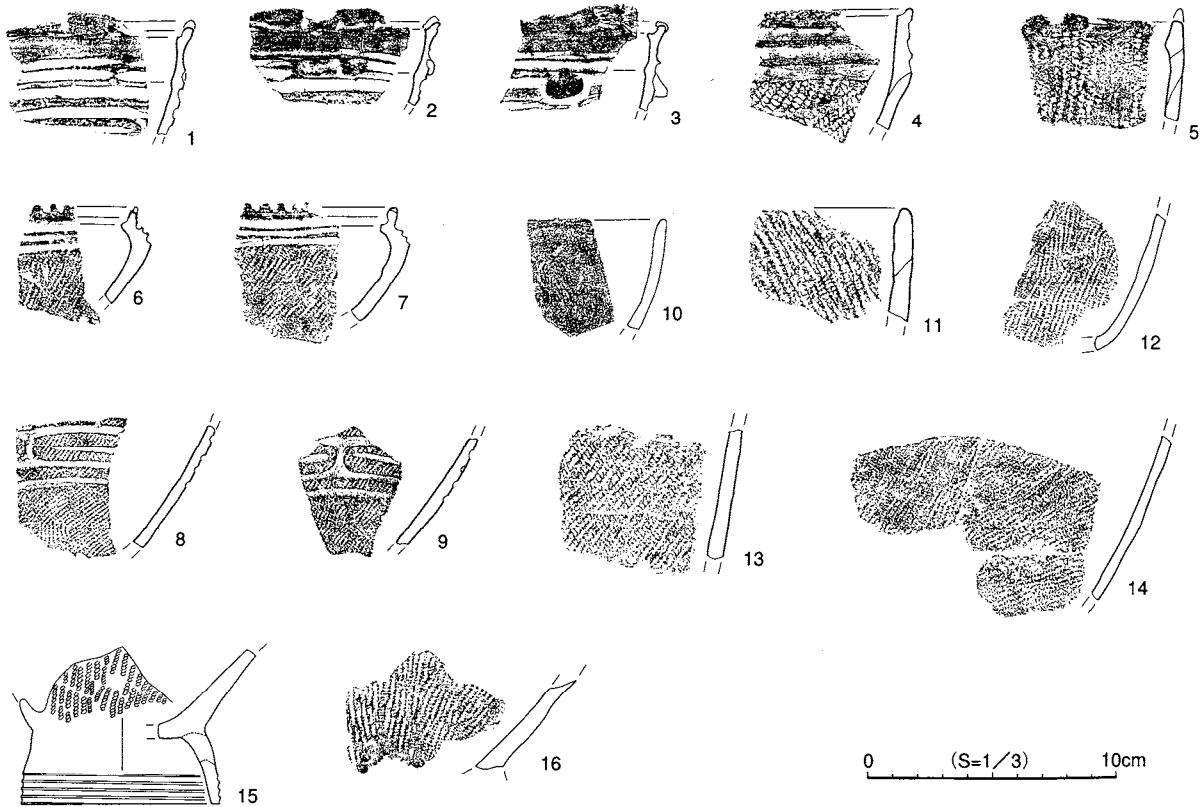


図18 出土遺物 縄文土器 3・弥生土器

丸く、内側に若干段がつく。内傾接合の輪積痕が明瞭である。図18-12～14は胴部破片で、詳細は不明である。

(浅田)

2 弥生土器(図18-15、16)

弥生土器で図示可能だったものは図18-15、16の2点である。出土した破片全てが類似した胎土や焼成であることから、一個体分の出土とみなすことができる。従って時期細分は行っていない。器種は台付鉢だが、台部と胴下半部のみ確認されたため鉢部の詳細は不明である。胴部外面には単節R Lを斜位に施文している。台部は直立に近い角度で立ち上がり、下部に4条の横走沈線が巡る。全体的に摩滅が著しく、接合も容易ではなかった。色調は浅黄橙色で、焼成はやや軟質な感を受ける。資料数に制限があり詳細な所産時期は不明であるが、敢えて挙げるならば中期であろうか。

(浅田)

3 石器・石製品

今回の調査で出土した石器及び石製品は、石鏃4点、石匙4点、不定形石器1点、磨製石斧2点、砥石1点で、剥片を素材とする石器の石質は珪質頁岩及び玉髄質珪質頁岩である。ほとんどが縄文時代に属するものと考えられ、A区に比べ器種及び出土数も少なかったため敢えて分類は行わず、個々の特徴を述べるに留める。

1 石鏃(図19-1~4)

遺構外から2点、旧沢地形内から2点の計4点出土している。1は尖基無茎石鏃。先端がやや長めに作られている。2も尖基無茎石鏃。1に比べ全長がやや短めに作られ、平面形は菱形に近い。2点共押圧剥離調整が両面に施され、厚さは4mm程度で比較的薄目に作られている。3は凹基無茎石鏃。先端部を欠損する。基部はわずかに抉られている。4は凸基の有茎石鏃。先端部及び基部を欠損する。石質は3が玉髄質珪質頁岩の他は珪質頁岩。

2 石匙(図19-5~8)

つまみ部が長軸側に付く縦長のものが3点と短軸側に付く横長のものが1点の計4点、遺構外及び旧沢地形内から出土している。5は縦長。刃部はバチ型にやや内湾気味の1辺と2辺の緩やかな外湾気味の曲線により構成される。刃部の調整は押圧剥離で、剥離は一部背面にも認められる。背面の剥離は腹面に比べるとかなり微細である。両面剥離の部分はかなり摩耗している様子がうかがえ、使用痕の可能性が高い。6も縦長。刃部は大きく内湾する曲線及び緩やかな外湾気味の曲線の2辺により構成される。刃部の調整は片面の押圧剥離である。7も縦長で、3辺の直線により短冊形の刃部が構成される。刃部の調整は片面押圧剥離である。8は横長。つまみ部は大味に作られ、刃部は比較的大きめの両面押圧剥離により緩やかな外湾気味の曲線に1辺作られている。石質は全て珪質頁岩。

3 不定形石器(図19-9)

第21号土坑覆土中から1点出土している。9は両側縁に片面の押圧剥離により刃部が調整される。刃部は1辺が内湾し、もう1辺が緩やかに外湾する2辺の曲線により構成され、スクレイパーと思われる。被熱資料で、石質は珪質頁岩。

4 磨製石斧(図19-10、11)

遺構外から欠損品が2点出土している。10は刃部全体と基部の約2/3を欠損する。残存部の側面には擦り切り痕が認められる。残存部の厚みから、比較的大型の石斧になるものと思われる。11は基部を欠損する。円形の刃部には新旧の刃こぼれ痕が認められ、刃こぼれ後に研磨している様子も確認できる。現存する側面部に明確な擦り切り痕は認められない。石質は2点共緑色細粒凝灰岩。

5 砥石(図19-12)

1点出土している。12は2面の使用痕跡が認められる。石質は凝灰岩。

(笹森)

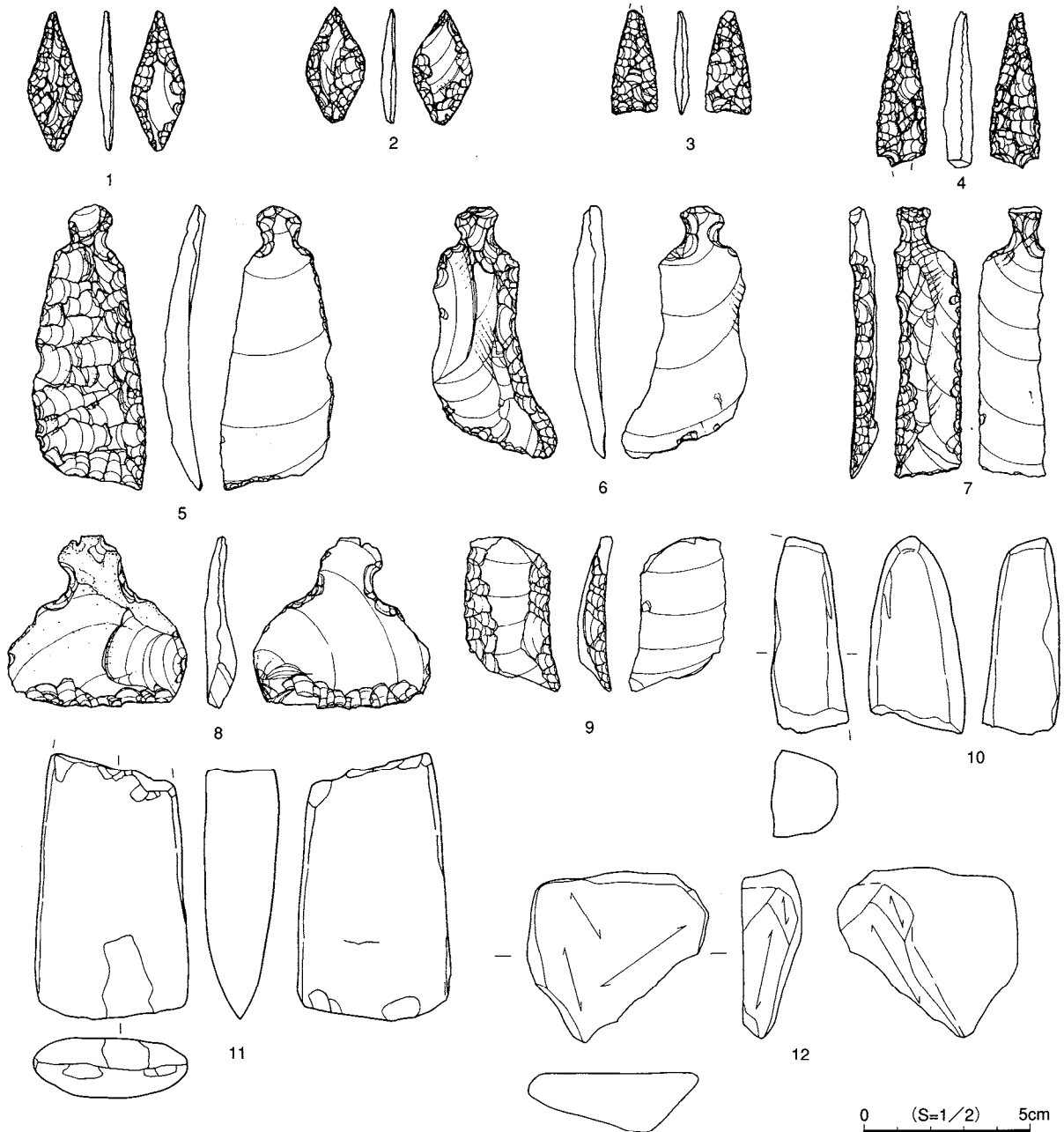


図19 出土遺物 石器・石製品

石器・石製品

図番号	器種	出土遺構名	出土地点	層位	遺存度	石質	備考	計測値(mm)			重量(g)	整理番号
								長さ	幅	厚さ		
19-1	石鏃	—	P-303	Ⅲ	1	珩質頁岩	尖基無茎	42	16	4	2.3	31
19-2	石鏃	—	Y-295	I	1	玉髓質珩質頁岩	尖基無茎	35	18	4	2.3	30
19-3	石鏃	—	Z-295	I	2	珩質頁岩	凹基無茎	(31)	18	4	(1.7)	32
19-4	石鏃	—	AB-283	Ⅲ	2	珩質頁岩	凸基有茎	(47)	16	9	(4.9)	33
19-5	石匙	—	Q-302	Ⅲ	1	珩質頁岩	縦長	84	34	7	21.7	26
19-6	石匙	—	AF-285	Ⅲ	1	珩質頁岩	縦長	82	20	8	13.3	27
19-7	石匙	—	Z-297	I	1	珩質頁岩	縦長	71	34	9	18.3	28
19-8	石匙	—	R-316	Ⅱ	1	珩質頁岩	横長	52	54	8	16.5	29
19-9	不定形	SK21	T-313	覆土	1	珩質頁岩	スレイバー・被熱資料	46	29	8	11.5	25
19-10	磨製石斧	—	Z-301	Ⅲ	2	緑色細粒凝灰岩	擦り切り	(59)	(22)	(28)	(57.5)	176
19-11	磨製石斧	—	R-306	Ⅱ	2	緑色細粒凝灰岩	擦り切り?	(75)	46	21	(136.2)	175
19-12	砥石	—	AA-303	Ⅲ	1	凝灰岩	2面使用	53	52	18	47.2	177

※遺存度 1 完形 2 欠損(土製品も)

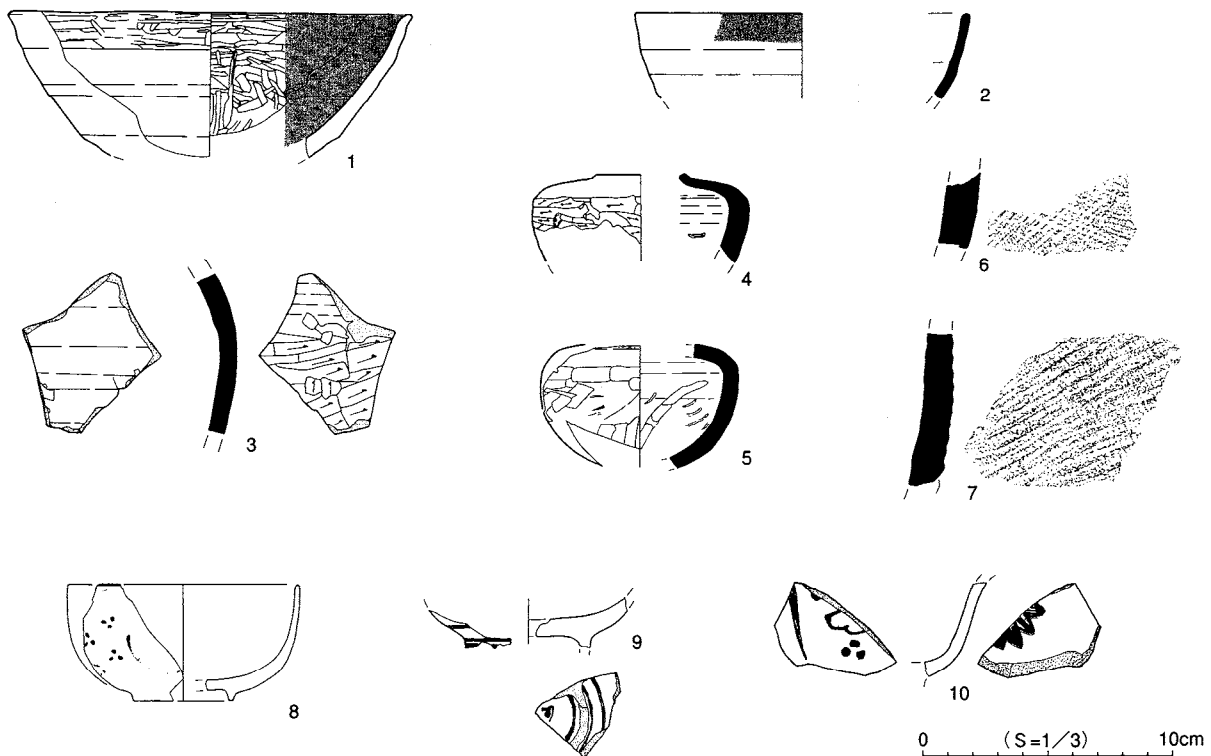


図20 出土遺物 土師器・須恵器・陶磁器

4 土師器・須恵器(図20-1~7)

平安時代の土器は極少数の出土であった。土師器は3点出土し、図20-1のみが図示可能であった。轆轤成形後、内面と外面口縁部に篋磨きが施され、内面に黒色処理が施されている。須恵器は8点出土しており、その内6点を図示した。図20-2は須恵器坏である。轆轤成形で口唇部は体部の緩やかなカーブを保ちながら立ち上がる。口縁部外面に黒変が観察される。図20-3は須恵器壺（長頸壺）の胴部と思われ、轆轤成形後外面下半に篋削が施されている。図20-4、5はいずれも小型の須恵器短頸壺で、屈曲が強く、口縁部から胴部最大径にかけて押し潰されたような器形となっている。轆轤成形後、胴部最大径の部分から下半に細かい篋削が施される。復元実測であるため多少の誤差は持っていると思われるが、このような器形はあまり例を見ない。図20-5では内面に爪跡が確認できる。図20-6、7は須恵器大甕の胴部破片で、外面に平行叩き目が確認できる。須恵器に関しては焼成等から、すべて五所川原窯産であると考えられる。所産時期に関しては9~10世紀代と思われる。

(浅田)

5 陶磁器(図20-8~10)

近世以降の所産と思われる陶磁器片が22点出土している。20世紀代の所産が多いが、これらは図示を行っていない。ここでは近世所産の3点を図示した。いずれも肥前産で、所産時期は図20-8、9が

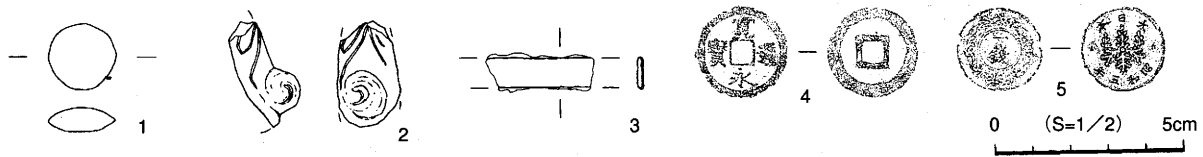


図21 出土遺物 土製品・金属製品

大橋編年のIV期の碗、図20-10はV期の鉢?と思われる。その他に図示出来なかったが、近世の所産である唐津の刷毛目皿と思われる小片等も出土している。

(浅田)

6 土製品(図21-1、2)

図21-1は碁石状土製品。色調はにぶい橙色を呈し、焼成は良好。胎土は精製され緻密で橙色粒子を少量含んでいる。平面形はほぼ円形で、断面形はレンズ状を呈している。表面は滑らかで周縁部はわずかに肥厚し波打っている。型打成形の可能性も考えられるが、製作技法に関しては不明な点が多い。直径18mm、厚さ6mm、重さ1.5gを計測し、現在の碁石に比べると大きさは一回りから二回りほど小さい。少量ではあるが、表面には光沢のある黒色部が残存しており、黒碁石として使用されていた可能性が考えられる。また、分析に出すことはできなかったが、黒色残存部の状況からは、全体に漆状のものが塗られていた可能性も考えられる。平成9年度のA区の調査でも碁石状土製品は2点出土していて、近世以降の遺物として報告されているが、山形県米沢市の「大浦B遺跡」からは奈良末葉から平安初期の所産と位置付けられるものが出土しており、碁石の種類や変遷を知る上でも本遺跡から出土した3点は貴重な資料と言えよう。ちなみに現在市販されている碁石は、合成樹脂製品を除くと黒碁石は那智黒と呼ばれている硬質の粘板岩、白碁石は日向蛤あるいは朝鮮蛤(碁石蛤)の貝殻を素材としているものが上級品とされている。図21-2は犬(狛犬?)と思われる型打成形の土製品。尻尾及び背中の一部が残存する。尻尾は巻き、背中には左右対称の沈線が施される。内面指頭圧痕。

(笹森)

7 金属製品(図21-3~5)

鉄製品1点、銭貨2点を図示した。図21-3は刀子の基部と思われる。両端を欠損しているため詳細は不明である。古代以降の所産と考えられる。図21-4は寛永通宝で、古寛永と思われる。図21-5は桐一銭青銅貨で、昭和5年の銘が確認できる。いずれも遺存状況は比較的良好である。

(浅田)

第3節 遺物出土状況(図22、23)

A区では遺構に伴って、比較的纏まった量の遺物が出土した。しかしB区の調査では、遺構内からの遺物出土が極僅かであり、その出土状況も覆土と共に流入するものが大半を占める。従って提示遺物の大半が遺構外出土であった。出土層位も遺物包含層とした基本層序第Ⅲ層が中心となっているが、第Ⅰ～Ⅳ層でも確認されており、状況は一定ではない。ここでは出土遺物の所産時期毎に出土状況を検討し、隣接する地区の状況も踏まえ、可能な範囲で該当時期の状況についても検討したい。

縄文時代 グリッド別の出土状況を見ると、A区に隣接する北東側で多く分布しており、特に農道部分の調査では比較的纏まった出土を見た。逆に南東側に行くにつれて少なくなる傾向にあり、最も東側の拡張部分においては全く出土を見なかった。A区では北東に位置する崖線沿いに遺構が集中しており、遺物も纏まりを見せている。一方B区では遺構の分布が若干南側に偏るが、遺物分布とは重複せず、A区とは大きく状況が異なる。恐らくA区では遺構に伴う時期に周辺での活動が存在していたが、B区においては纏まった活動状況にはなかったことを示唆している。つまり活動の中心はA区の側にあり、B区はその周縁地域にあたると思われる。接合状況を見ると、遠距離で接合する例は少なく、接合してもどちらか一方が第Ⅰ、Ⅱ層出土となっている。接合線を見ると東西方向に大きく動く傾向を見て取れる。このことから耕作等によって巻き上げられ運ばれたものと思われる。その他は比較的纏まった範囲内に収まっている。A区出土の縄文土器との接合も試みたが、限られた時間もあって接合は見られなかった。従って、耕作土である第Ⅰ、Ⅱ層や風倒木痕内を除く、第Ⅲ、Ⅳ層内出土遺物に関しては比較的廃棄された位置に近い可能性がある。石器類から見ると石鏃と石匙がある程度近接した位置(1～3グリッドの範囲内)から出土している。層位的には後世の耕作等による移動も大いに考えられるが、遺物がある程度平面的に原位置を留めていると仮定するならば、これらの出土区域は狩猟場、或いは射止めた獲物を解体する場であったとも考えることができる。

弥生～古墳時代 弥生土器が出土しているが出土数が極めて少なく、出土位置もZ-296・297の2グリッド内に限定されている。旧沢地形の端部に位置するが、基本層序第Ⅲ層内からの出土であったことから、縄文土器と同様、第Ⅲ層に混入していたものと思われる。前回調査されたA区では該当する時期の遺物は出土しておらず、またA区で最も注目された続縄文土器と古式土師器も今回確認できなかった。一方、東側に位置する隠川(12)遺跡において、前期と後期所産と考えられる破片が若干出土している。その他にも近年の発掘調査によって前田野目台地上の遺跡調査数は確実に増加しており、該当時期の資料もそれに伴い増加してきている。しかしその出土状況は本遺跡同様、後続時期の遺構覆土や耕作土を中心とする現地表面から比較的浅い層からの出土が目立つ。A区での出土層位も、攪乱層である第Ⅰ層を中心とした出土であった。このように、該当時期の遺物が第Ⅰ、Ⅱ層に含まれている可能性があった訳だが、B区では調査期間等の都合上、第Ⅰ層を重機で除去せざるを得なかった。このため今回の調査でも本来第Ⅰ層中に存在していたものを、表土除去作業によって失ってしまった可能性を否定できない。当然表土除去作業には立ち会っているが、A区で出土した続縄文土器、古式土師器は共に破片の大きさが平均で1.5cm×1.5cmとされていることを考えると、作業中に発見するこ

とは非常に困難である。表土、耕作土層と呼ばれる層位からの遺物出土に関して、注目される機会は少ない。しかしその中に含まれる遺物を失うことによって、一時代分の情報を失ってしまう可能性があることを心にとどめておく必要がある。

平安時代 土師器・須恵器が出土しているが、グリッド別に出土状況を見るとUラインより南側での出土となっている。種類別では、土師器が比較的散漫な状況に対して、須恵器は比較的纏まった出土状況を示している。しかし出土量が少ないこともあり、接合が見られたのは隣接する破片のみという状況である。S K26内から須恵器坏(図20-2)が出土しているが、覆土内からの出土であり、須恵器の出土状況がその周辺からしか出土を見ない状況を考えると、周囲の包含層から遺構廃絶後に流入している可能性が高い。土師器坏(図20-1)はW - 295グリッド付近から出土しているが1点だけU - 312グリッドから出土している。耕作土である第Ⅱ層から出土しており、本来W - 295グリッド付近に存在したものが、耕作等何らかの要因によって運ばれたものと思われる。前田野目台地上には平安時代の遺構、遺物が数多く検出、出土しているが、本遺跡はA区でも該当時期の遺物、遺構の出土、検出数が少ない。しかし旧沢地形内の火山灰・焼土の検出状況に人為的な堆積の可能性も指摘できることから、本遺跡周辺でも何らかの活動が行われていたことを示唆している。

近世以降 中世の遺構や遺物は検出されておらず、該当時期の詳細に関しては不明である。近世以降の遺物として陶磁器や土製品の出土が見られた。当該期の遺物で最も多く出土しているのが陶磁器である。しかし大半は観察所見から20世紀の所産と考えられること、出土層位も第Ⅰ層が中心であること、調査区内に散漫な分布を見せること等から、これらは調査前の土地利用状況であった、リング畑等の農作業に携わった人々の廃棄物であると考えられる。接合状況を見ると陶磁器で1点遠距離接合が見られる。接合資料が小片であることから、他の遠距離接合と同様、後世の耕作等によって動いたものと思われる。土製品、金属製品に関しても特に特徴的な分布状況は示しておらず、陶磁器の分布範囲内に納まっており、陶磁器と同様の状況であったと考えられる。遺跡周辺の近世の状況に関しては不明であるが、遺物の散布が少なからずあることから、多少なりとも何らかの活動が行われていたものと思われる。

(笹森・浅田)

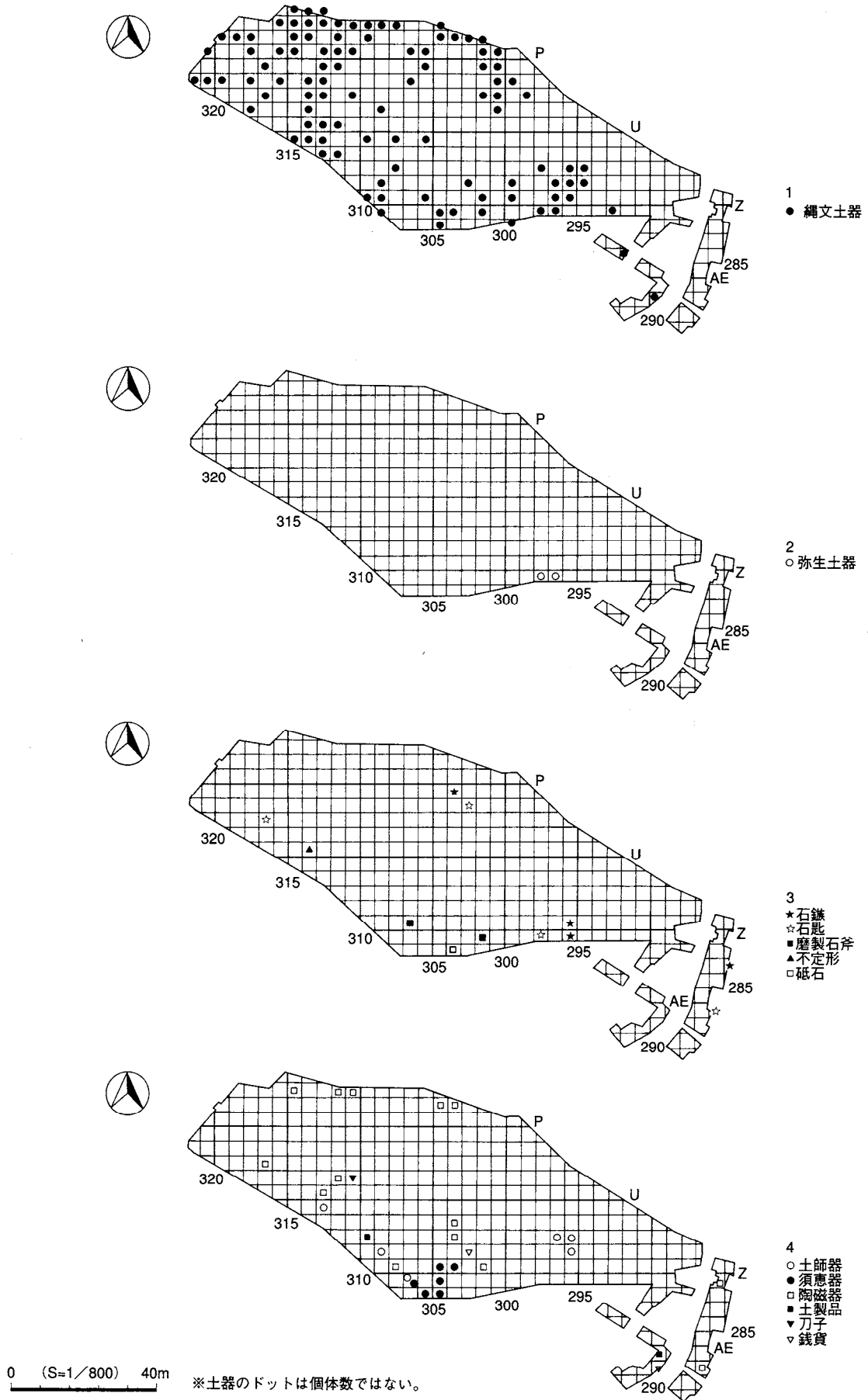


図22 グリッド別遺物分布図

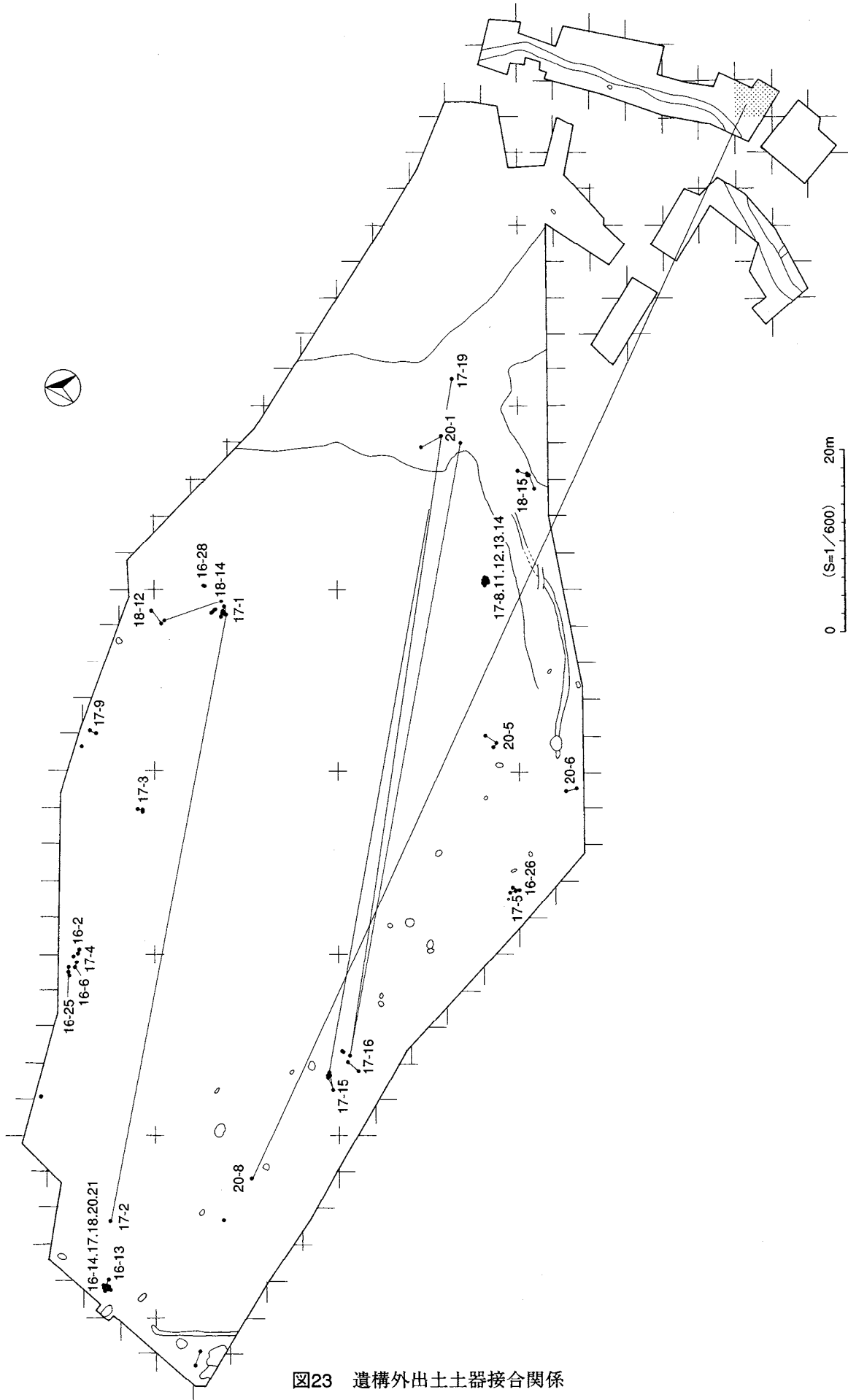


図23 遺構外出土土器接合関係

隠川(11)遺跡Ⅱ

土器(縄文時代)

胎土略号: A~石英 B~繊維 C~小礫 D~海綿骨針

図番号	分類	出土遺構名	出土地点	層位	器種	部位	外面地文・文様	内面調整	胎土	備考	整理番号
16-1	I-1	-	Y - 301	Ⅲ	深鉢	口	結節回転文横位	横磨	ABCD		165
16-2	I-1	-	M - 309	Ⅲ	深鉢	底	不明	不明	BD	底径(25.0cm)	153
16-3	I-2	-	R - 298	Ⅲ	深鉢	胴	単軸絡糸体第1類縦位	縦磨	ABD		067
16-4	Ⅱ-1	-	U - 305	Ⅲ	深鉢	口	鋭利な棒状工具による刺突	磨	ACD	表面摩滅、粘土紐装飾	078
16-5	Ⅱ-2	-	O - 317	Ⅲ	深鉢	胴	結束第1種横位	撫磨	ACD		079
16-6	Ⅲ-1	-	M - 310	Ⅲ	深鉢	口	単軸絡糸体第1類横、斜位	磨	ACD	焼成硬質	074
16-7	Ⅲ-1	-	M - 310	Ⅲ	深鉢	胴	単軸絡糸体第1類斜位	縦磨	AC	焼成硬質	072
16-8	Ⅲ-1	-	M - 310	Ⅲ	深鉢	胴	単軸絡糸体第1類斜位	縦磨	AC	焼成硬質	073
16-9	Ⅲ-1	-	W - 294	Ⅲ	深鉢?	口	撫、磨	撫磨	ACD	折返し口縁	066
16-10	Ⅲ-1	-	W - 291	Ⅲ	深鉢?	口	撫、磨	撫磨	ACD	折返し口縁	065
16-11	Ⅲ-1	-	W - 294	Ⅲ	深鉢	胴	撫、磨	撫	A	粘土紐横位貼付後竹管による刺突	081
16-12	Ⅲ-1	-	W - 294	Ⅲ	深鉢	胴	撫、磨	撫	A	粘土紐横位貼付後竹管による刺突	082
16-13	Ⅲ-2	-	N - 319他	Ⅱ,Ⅲ	深鉢	口	横走沈線	横撫	ACD	口唇部平坦、輪積痕明瞭	047
16-14	Ⅲ-2	-	N - 319	Ⅲ	深鉢	口	横走沈線	撫	AC		054
16-15	Ⅲ-2	-	N - 319	Ⅲ	深鉢	口	2条横走沈線	撫	AC	口唇部平坦、輪積痕明瞭	048
16-16	Ⅲ-2	-	N - 319	Ⅲ	深鉢	口	撫、磨	撫磨	AC	口唇部外側に強い撫つけにより折返し	161
16-17	Ⅲ-2	-	N - 319	Ⅲ	深鉢	胴	斜格子目沈線文、横走沈線	撫	AC	輪積痕明瞭	046
16-18	Ⅲ-2	-	N - 319	Ⅲ	深鉢	胴	斜格子目沈線文	撫	AC		053
16-19	Ⅲ-2	-	O - 320	Ⅱ	深鉢	口	撫	撫磨	AC	口径(11.5)cm	154
16-20	Ⅲ-2	-	N - 319	Ⅱ	深鉢	胴	斜格子目沈線文	横撫	AC		051
16-21	Ⅲ-2	-	N - 319	Ⅱ	深鉢	胴	斜格子目沈線文	撫	AC		061
16-22	Ⅲ-3	-	Q - 300	Ⅲ	深鉢	口	単節R L横位	撫	AD		083
16-23	Ⅲ-3	-	Q - 300	Ⅲ	深鉢	口	単節R L横位	撫	AD		026
16-24	Ⅲ-3	-	M - 310	Ⅲ	深鉢	胴	単節R L斜位	撫	AC		019
16-25	Ⅲ-3	-	M - 310	Ⅲ	深鉢	胴	単節R L斜位	撫磨	AC		025
16-26	Ⅲ-3	-	Y - 308	Ⅱ	深鉢	胴	単節L R斜位	撫磨	ACD		039
16-27	Ⅲ-3	-	Q - 300	Ⅲ	深鉢	胴	単節R L横位	撫磨	ACD		042
16-28	Ⅲ-3	-	Q - 299	Ⅳ	深鉢	胴	単節R L斜位	撫	ACD	器壁厚い	021
16-29	Ⅲ-3	-	T - 312	Ⅱ	深鉢	胴	単節L R縦位	撫	ACD		005
17-1	Ⅲ-3	-	Q - 300	Ⅲ	深鉢	胴	単節R L横位	縦撫	ACD	二次加熱による変色。底径(6.3)cm	043
17-2	Ⅲ-3	-	Q - 300他	Ⅱ,Ⅲ	深鉢	底	単節R L横位	撫	AC	底面網代痕	064
17-3	Ⅲ-3	-	O - 305	Ⅲ	深鉢	胴	単節L R横位	撫	ACD		091
17-4	Ⅲ-3	-	M - 310	Ⅲ	深鉢	胴	単節R L縦、斜位	撫磨	AC		041
17-5	Ⅲ-3	-	Y - 308	Ⅱ	深鉢	胴	単節L R斜位、横走沈線	撫磨	ACD		141
17-6	Ⅲ-3	-	U - 313	Ⅱ	深鉢	胴	単節L R横位	撫磨	AC		012
17-7	Ⅲ-3	SK-30	O - 301	Ⅲ	深鉢	底	単軸L R縦位	撫	ACD	底径(8.0)cm	063
17-8	Ⅲ-3	-	Y - 299	Ⅲ,Ⅳ	深鉢	底	撫、磨	撫磨	AC	底径(12.4)cm	122
17-9	Ⅲ-3	-	N - 304他	Ⅲ	深鉢	底	撫、磨	撫磨	ACD	焼成硬質 底径(11.6)cm	164
17-10	Ⅲ-3	-	R - 301	Ⅲ	深鉢	底	撫?摩滅により不明	撫?	AC	内面に甕?状工具痕多数 底径(9.0)cm	152
17-11	Ⅲ-3	-	Y - 299	Ⅲ	深鉢	口胴	単節L R縦位	撫磨	AC	口径(23.5)cm	145
17-12	Ⅲ-3	-	Y - 299	Ⅲ	深鉢	口	単節L R縦位	撫磨	AC		126
17-13	Ⅲ-3	-	Y - 299	Ⅲ	深鉢	口	単節L R縦位	撫磨	AC		127
17-14	Ⅲ-3	-	Y - 299	Ⅲ	深鉢	胴	単節L R縦位、磨	撫磨	AC		124
17-15	Ⅳ-1	-	T - 313	Ⅱ	台付鉢	口胴	横走沈線、突起貼付	磨	D	内面沈線、口唇・沈線部突起、内面煤付着	143
17-16	Ⅳ-1	-	U - 313他	Ⅱ	台付鉢	口	横走沈線、突起貼付	磨	D	内面沈線、口唇・沈線部突起	144
17-17	Ⅳ-1	-	U - 314	Ⅱ	台付鉢	台	胴部単節L R横位、台部磨	磨	ACD	内面黒色 台部径(9.8)cm	150
17-18	Ⅳ-1	-	M - 311	Ⅲ	台付鉢	台	撫、磨	撫磨	-	軟質 底径(10.8)cm	162
17-19	Ⅳ-2	-	T - 313他	Ⅱ,Ⅲ	壺?	底	摩滅により不明	不明	-	軟質 底径(5.0)cm	151
18-1	Ⅳ-1	-	T - 313	Ⅱ	台付鉢	口	横走沈線	磨	D	口唇部に突起貼付、沈線断絶部分に隆起作出	138
18-2	Ⅳ-1	-	T - 313	Ⅱ	台付鉢	口	横走沈線	磨	-	口唇部と沈線内に突起貼付	014

図番号	分類	出土遺構名	出土地点	層位	器種	部位	外面地文・文様	内面調整	胎土	備考	整理番号
18-3	IV-1	-	T - 313	II	台付鉢	口	横走沈線、突起貼付	磨	D	内面沈線	129
18-4	IV-1	-	O - 314	III	鉢?	口	単節LR横位、三条横走沈線	磨	AD	輪積痕明瞭	128
18-5	IV-2	-	N - 309	III	深鉢	口	単節LR斜位	横撫	AC	口唇部に突起貼付	136
18-6	IV-1	-	P - 301	III	台付鉢	口	単節LR横位、横走沈線	撫磨	D	口唇部刻み	131
18-7	IV-1	-	P - 300	III	台付鉢	口	単節LR横位、横走沈線	磨	D	口唇部刻み	130
18-8	IV-1	-	U - 312	II	台付鉢	胴	単節LR横位、沈線文	磨	AD	内面黒色	134
18-9	IV-1	-	U - 312	II	台付鉢	胴	単節LR横位、沈線文	磨	AD	内面黒色	140
18-10	IV-1	-	Y - 296	I	鉢?	口	摩滅により不明	不明	A	軟質	163
18-11	IV-2	-	N - 317	II	深鉢	口	単節RL横位	撫?	D	輪積痕明瞭	096
18-12	IV-2	-	O - 300他	III	深鉢	胴	単節LR斜位	撫	ACD		029
18-13	IV-2	-	W - 294	IV	深鉢	胴	単節LR横位	削撫	AC		034
18-14	IV-2	-	Q - 300他	III	深鉢	胴	単節LR横位	撫	AC		025

土器 (弥生時代)

図番号	種類	出土遺構名	出土地点	層位	器種	部位	外面地文・文様	内面調整	胎土	備考	整理番号
18-15	弥生土器	-	Z - 296他	III	台付鉢	胴台	単節RL斜位、台下部4条横走沈線	撫磨	ACD	17-16と同一個体、台部径8.1cm	149
18-16	弥生土器	-	Z - 297	III	台付鉢	胴	単節RL斜位	撫磨	ACD	17-15と同一個体	139

土師器・須恵器 (平安時代)

図番号	種類	出土遺構名	出土地点	層位	器種	部位	外面調整	内面調整	胎土	備考	計測値 (cm)			整理番号
											口径	最大径	器高	
20-1	土師器	-	W - 295他	II, IV	坏	口胴	轆轤撫→口唇部磨	磨	CD	内面黒色処理	(16.0)	-	-	148
20-2	須恵器	SK26	Z - 304	覆土	坏	口	轆轤撫	轆轤撫	ACD	内外面還元焼成硬質、外面口縁部黒変	(13.4)	-	-	166
20-3	須恵器	-	Z - 306	III	壺	胴	轆轤撫→磨削	轆轤撫	ACD	内外面還元、内部酸化焼成硬質	-	-	-	016
20-4	須恵器	-	AA - 304	III	短頸壺	口胴	轆轤撫→横磨削	轆轤撫	ACD	内外面還元、内部酸化焼成軟質	(3.5)	(8.7)	-	147
20-5	須恵器	-	Y - 303他	II	短頸壺	胴	轆轤撫→横磨削	轆轤撫	ACD	内外面還元、内部酸化焼成硬質	-	(8.0)	-	146
20-6	須恵器	-	AA - 305	III	壺	胴	格子目状叩目	撫	AC	内外面還元、内部酸化焼成硬質	-	-	-	017
20-7	須恵器	-	Z - 305	II	壺	胴	輪積→平行叩目	当具痕(不明脱)	AC	内外面還元、内部若干酸化焼成軟質	-	-	-	018

陶磁器 (近世以降)

図番号	種類	出土遺構名	出土地点	層位	器種	部位	備考	計測値 (cm)			整理番号
								口径	高台径	器高	
20-8	磁器	-	AF - 286他	I, II	碗	口胴	外面丸文 肥前IV期	(15.4)	(4.0)	(4.7)	167
20-9	磁器	-	M - 314	III	碗?	底	高台内変形字銘 肥前IV期	-	(4.8)	-	169
20-10	磁器	-	M - 308	II	鉢?	胴	外面宝文、内面笹文 肥前V期	-	-	-	168

土製品

図番号	種類	出土遺構名	出土地点	層位	遺存度	胎土	外面	内面	備考	計測値 (mm)			重量 (g)	整理番号
										長さ	幅	厚さ		
21-1	土製品	-	W - 309	II	1	橙色粒	平滑	-	礫石状土製品・黒色部残存	18.0	18.0	6.0	1.5	1
21-2	土製品	-	AE - 289	II	2	長石粒	平滑・沈線	指頭圧痕	犬(狛犬?)形土製品	(2.8)	(1.7)	5.0	(4.2)	2

金属製品

図番号	種類	出土遺構名	出土地点	層位	器種	備考	計測値 (cm)			重量 (g)	整理番号
							長さ	幅	厚さ		
21-3	鉄器	-	S - 310	III	刀子	茎部分?のみ残存、両端欠損	(2.9)	0.8	0.1	1.4	1
21-4	銭貨	-	X - 302	III	寛永通宝	古寛永	2.4	2.4	0.1	3.1	3
21-5	銭貨	-	AF - 289	I	堀一銭青銅貨	昭和五年銘	2.3	2.3	0.1	2.9	2

第V章 まとめ

隠川(11)遺跡は、五所川原市の南東部にあり、その源を梵珠山系に発して西流する前田野目川の右岸から北へ約300m、標高38～39m程の平坦な台地上に立地する。今回の調査区は平成9年度に調査されたA区の南東部、B区と呼称されていた部分で、調査以前はリング畑であった。後世の耕作・抜根等によりかなり削平を受けており、遺跡としての遺存状態はそれほど良好ではなかった。また、A区に比べ遺構・遺物量とも少なく、台地縁辺部を中心とした遺跡の本体から離れていく傾向が確認できた。

検出された遺構は土坑が多数を占めるが、時期決定できたものは縄文時代3基、平安時代2基の計5基にとどまり、大半は時期不明のものが多かった。溝跡も4条検出されていて、土坑同様時期決定の根拠に欠けるものが多かったが、第2号溝跡は重複する第26号土坑覆土中から須恵器環の口縁部片が出土しており、新旧関係から平安以降の所産であることには間違いはない。また、第4号溝跡は断面形状や覆土の状況から、平成9年度の調査で検出されたA区の第1号溝跡と同一の遺構であると考えられた。その他、焼土と白頭山火山灰(B-Tm)と思われる火山灰が旧沢地形を埋めるような状態で検出されている。覆土中からの遺物は時期・種類が様々で、堆積状況からは人為的な様相も認められ、火山灰降下後に焼土及びB-Tmを大量に廃棄しなければいけなかった状況が生じた結果とも考えられるが、どのような事態に起因したものかについては不明である。また、旧沢地形に関しては人為的な構築物と見なすことはできなかった。

遺物は、縄文時代(前・中・後・晩期)、弥生時代(中期)の土器や縄文時代の石器・石製品(石鏃・石匙・不定形石器・磨製石斧・砥石)、平安時代の土師器・須恵器、近世以降の陶磁器・土製品・銭貨(寛永通宝)、碁石状土製品、刀子、昭和初期の一銭青銅貨などが出土している。量的に中心となるのは縄文土器であるが、その中でも時期的には中期末から後期初頭にかけてのものが比較的多く出土している。

本調査区においては、少ないながらも中央部を除きほぼ調査区全域から遺物が出土している。しかし、遺物がある程度集中する場所が見つかって、そこから遺構が検出されるといった状況は第30号土坑の1例しか確認できなかった。A区の調査で出土した後北式土器と古式土師器の例のように、台地縁辺部から離れていくB区においては、遺構に絡まない遺物が散漫に出土するという状況が各時期に共通した特徴といえる。このことから、本調査区は縄文・弥生時代には住生活痕跡の希薄な狩猟・採集活動、或いは広場的な場所であったとも解釈することができる。古墳、平安～近世にかけても住生活痕跡の希薄な場所であり、当該期の居住域は今回の調査区の近隣に存在していた可能性が高い。

(笹森・浅田)

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1981『表館遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第61集
- 青森県教育委員会 1993『野脇遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第149集
- 青森県教育委員会 1996『野尻(4)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第186集
- 青森県教育委員会 1996『平野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第193集
- 青森県教育委員会 1997『実吉遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第207集
- 青森県教育委員会 1997『桜ヶ峰(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第208集
- 青森県教育委員会 1997『隈無(4)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第209集
- 青森県教育委員会 1997『隈無(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第210集
- 青森県教育委員会 1998『根の山遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第228集
- 青森県教育委員会 1998『隈無(1)遺跡・隈無(2)遺跡・隈無(6)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第237集
- 青森県教育委員会 1998『隠川(4)遺跡・隠川(12)遺跡Ⅰ』青森県埋蔵文化財調査報告書第244集
- 青森県教育委員会 1999『隠川(11)遺跡Ⅰ・隠川(12)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第260集
- 青森県教育委員会 1999『畑内遺跡Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書第262集
- 青森県教育委員会 2000『新町野遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第275集
- 青森県教育委員会 2000『餅ノ沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第278集
- 青森県教育委員会 2000『野木遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第281集
- 青森県教育委員会 1984『青森県歴史の道調査報告書』昭和58年度調査合本
- 五所川原市教育委員会 1996『真言館跡』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第19集
- 五所川原市教育委員会 1998『犬走須恵器窯跡発掘調査報告書』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第21集
- 五所川原市教育委員会 2000『隠川(2)外遺跡発掘調査報告書』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第22集
- 米沢市教育委員会 2000『大浦B遺跡発掘調査報告書』米沢市埋蔵文化財調査報告書第67集
- 印旛郡市文化財センター 1995『本佐倉城跡発掘調査報告書』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第94集
- 伊藤昭雄 1997「第Ⅱ章 遺跡周辺の地形と地質」『桜ヶ峰(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第208集
- 山口義伸 1998「第Ⅲ章 第1節 遺跡の地形および地質」『隠川(4)遺跡・隠川(12)遺跡Ⅰ』青森県埋蔵文化財調査報告書第244集
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』
- 須藤隆 1998『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究－縄文から弥生へ－』纂修堂
- 佐瀬隆・細野衛 1998『黒ボク土層生成論－その“堆積性”と“人為との関わり”について－』紀要XⅧ(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 大塚初重、戸沢充則 1996『最新日本考古学用語辞典』柏書房

写真図版



調査区遠景



基本層序



第1号土坑完掘 (N→)



第2号土坑完掘 (N→)



第3号土坑完掘 (N→)



第4号土坑完掘 (S→)



第5号土坑完掘 (N→)



第6号土坑完掘 (E→)



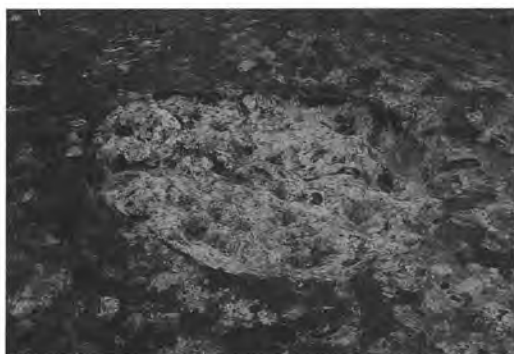
第7号土坑完掘 (N→)



第8号土坑完掘 (S→)



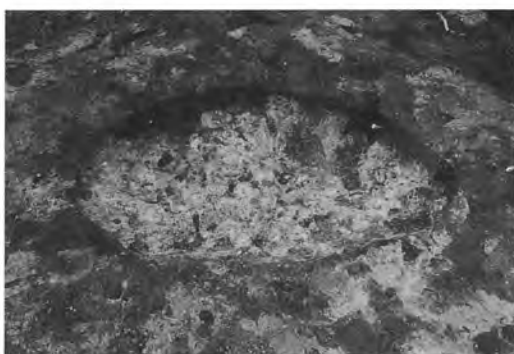
第9号土坑完掘 (SW→)



第10号土坑完掘 (E→)



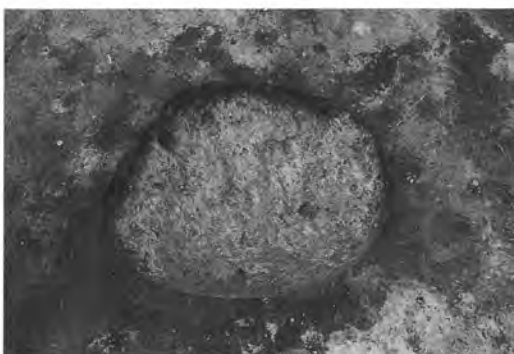
第11・12号土坑完掘 (N→)



第13号土坑完掘 (E→)



第14号土坑完掘 (E→)



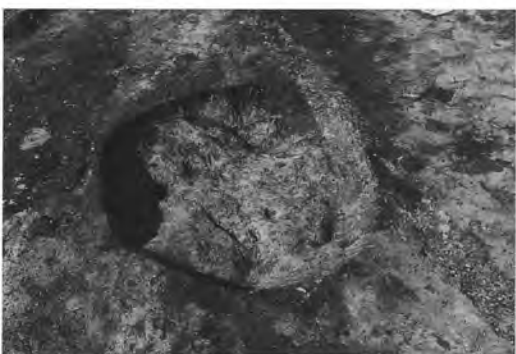
第15号土坑完掘 (E→)



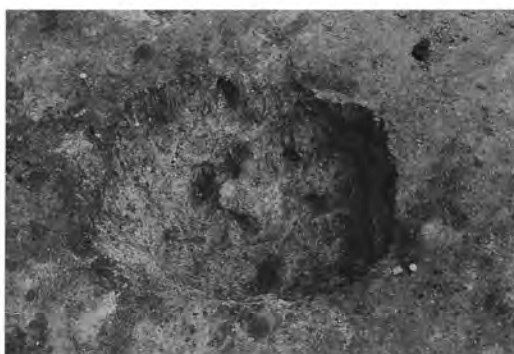
第16号土坑完掘 (S→)



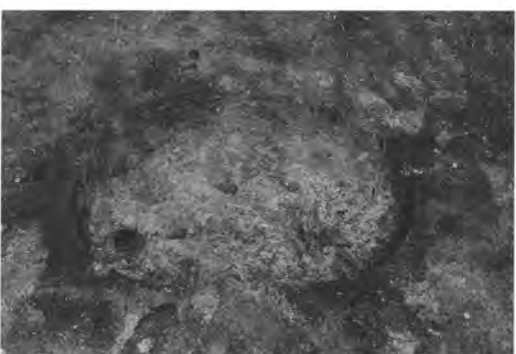
第17号土坑完掘 (S→)



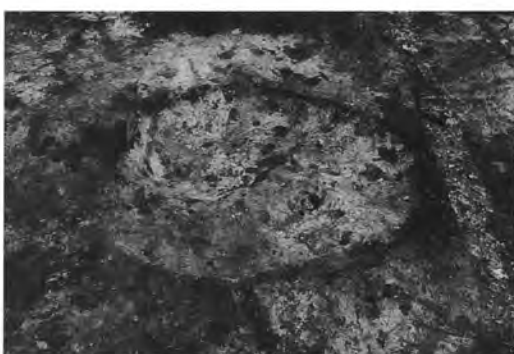
第18号土坑完掘 (S→)



第19号土坑完掘 (S→)



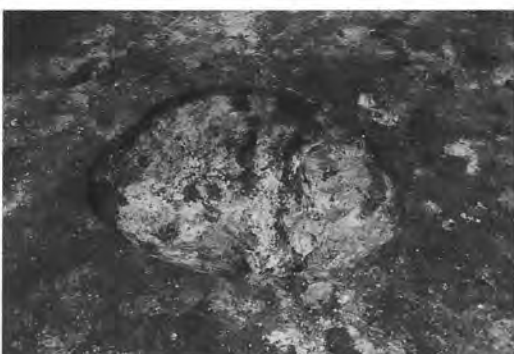
第20号土坑完掘 (E→)



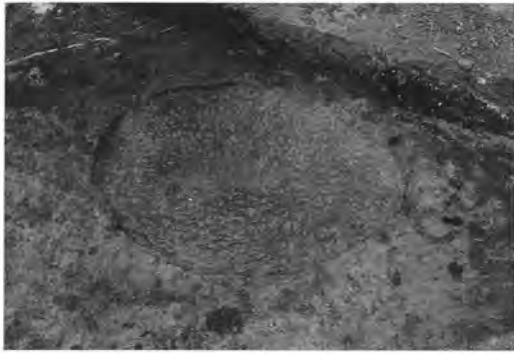
第21号土坑完掘 (S→)



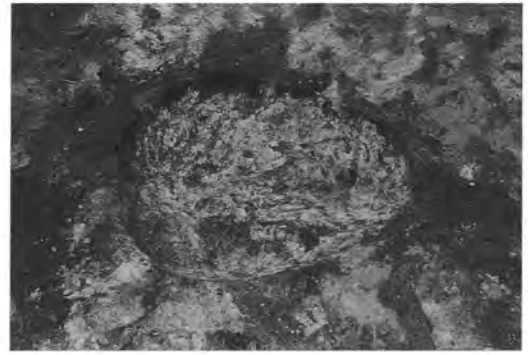
第22号土坑完掘 (S→)



第23号土坑完掘 (S→)



第24号土坑完掘 (S→)



第25号土坑完掘 (S→)



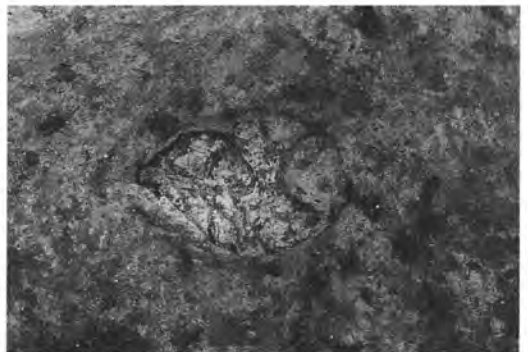
第26号土坑完掘 (E→)



第27号土坑完掘 (SW→)



第28号土坑完掘 (N→)



第29号土坑完掘 (S→)



第30号土坑遺物出土状況 (S→)



第30号土坑完掘 (S→)



第2号溝跡完掘 (E→)



第2号溝跡完掘 (E→)



第2号溝跡完掘 (W→)



第2号溝跡セクション (E→)



第3号溝跡完掘 (S→)



第3号溝跡セクション (S→)



第4号溝跡東端部完掘 (W→)



第4号溝跡農道西側完掘 (E→)



第4号溝跡セクション (SW→)



第5号溝跡完掘 (W→)



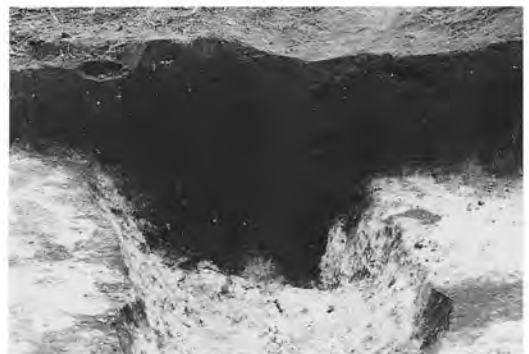
第4号溝跡農道東側完掘 (W→)



第4号溝跡セクション (SW→)



第4号溝跡セクション (N→)



第5号溝跡セクション (W→)



焼土・火山灰集中区 (W→)



焼土・火山灰集中区 (W→)



焼土・火山灰集中区 (W→)



焼土・火山灰集中区 (NW→)



焼土・火山灰集中区 (W→)



焼土・火山灰集中区遺物出土状況 (W→)



旧沢地形検出状況 (W→)



焼土・火山灰集中区遺物出土状況 (E→)



農道部遺物出土状況 (W→)



遺物出土状況 (N→)



遺物出土状況 (S→)



遺物出土状況 (N→)



遺物出土状況 (NW→)



遺物出土状況 (N→)



遺物出土状況 (N→)



遺物出土状況 (S→)



碁石状土製品出土状況 (SE→)



遺物出土状況 (SE→)



遺物出土状況 (SE→)



調査風景



調査風景



工事用道路部分完掘 (E→)



調査区完掘 1 (W→)



調査区完掘 2 (W→)



16-1



16-3



16-4



16-5



16-2



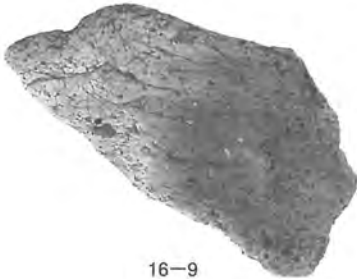
16-6



16-7



16-8



16-9



16-10



16-11



16-12



16-13



16-14



16-15



16-17



16-18



16-19



16-16



16-20



16-21

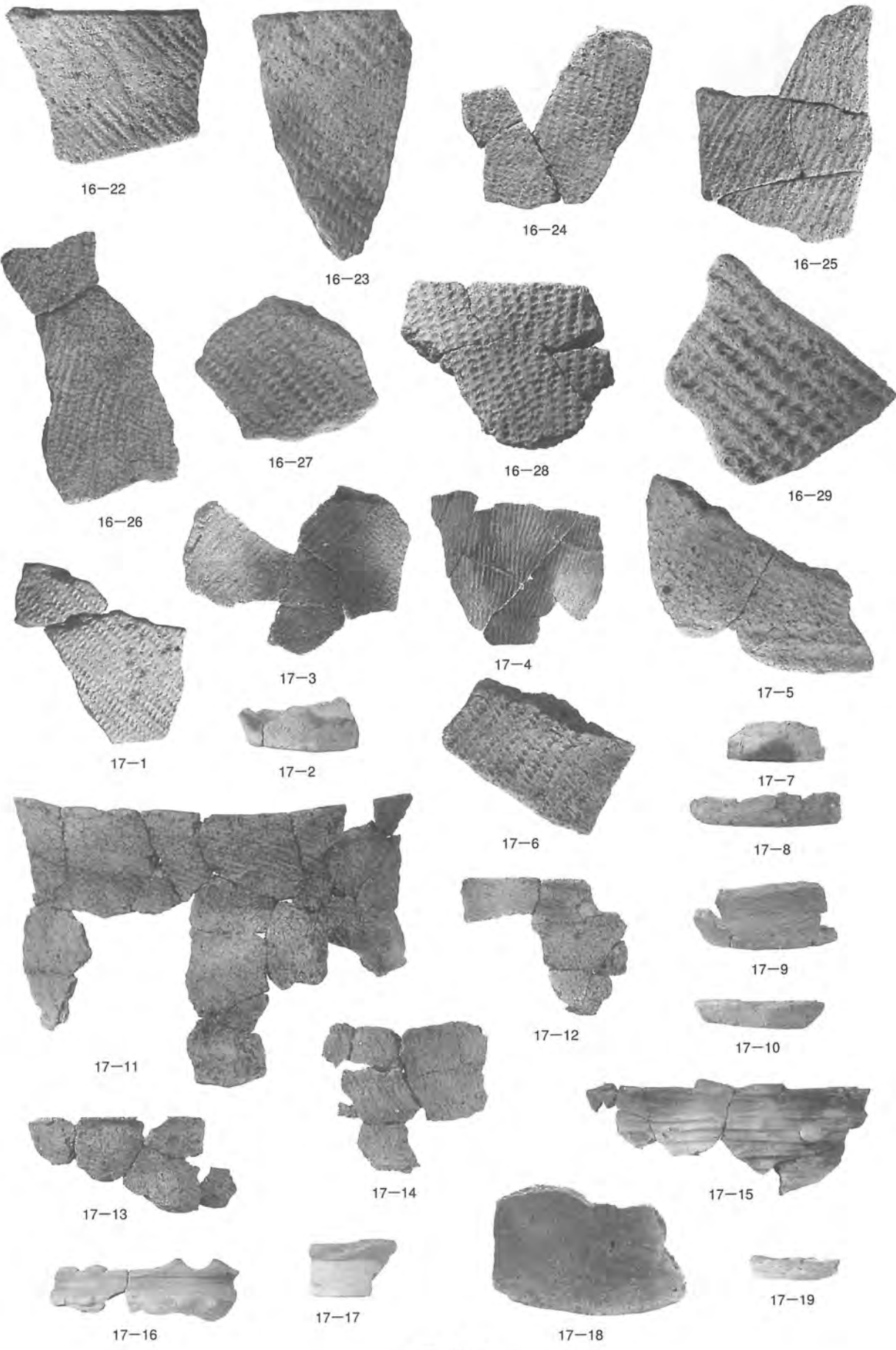


写真 11



18-1



18-2



18-3



18-4



18-5



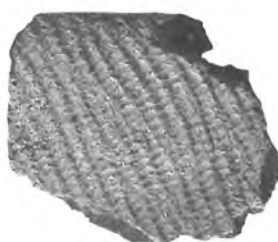
18-6



18-7



18-10



18-11



18-12



18-8



18-9



18-13



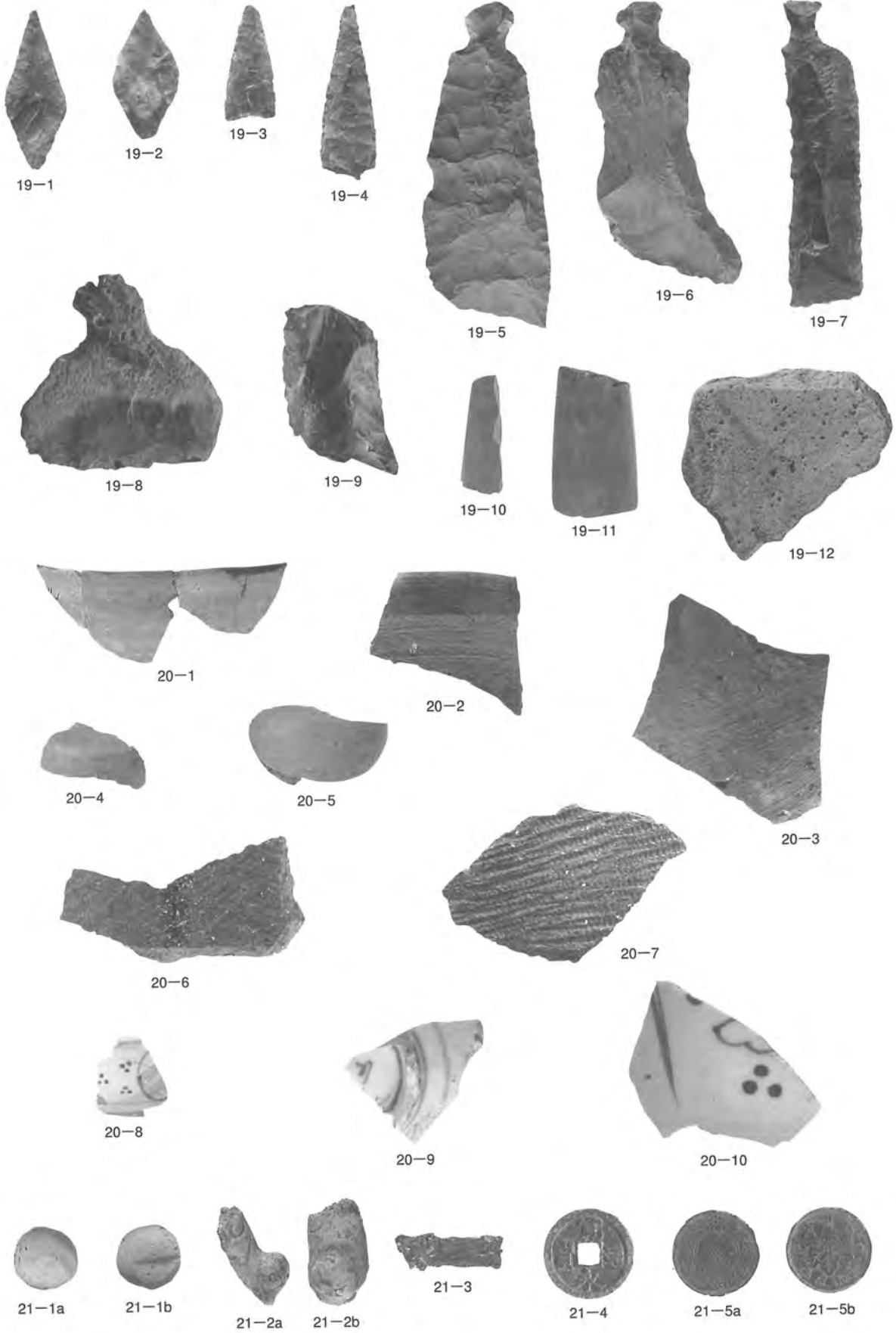
18-14



18-15



18-16



報告書抄録

ふりがな	かくれがわ(11)いせき に							
書名	隠川(11)遺跡Ⅱ							
副書名	国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第295集							
編著者名	笹森一朗・浅田智晴							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森市新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	2001年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かくれがわ(11)いせき 隠川(11)遺跡	あおもりけんごしよがわらしおおあぢ 青森県五所川原市大字 もっこざわあぢかくれがわ 持子沢字隠川 355、外	205	0507	40° 45′ 03″	140° 32′ 14″	19990419) 19990831	5,400	国道101号 浪岡五所 川原道路 建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
隠川(11)遺跡	散布地	縄文	土坑 3基		縄文土器・石器・砥石			
	散布地	弥生			弥生土器			
	散布地	平安	土坑 2基 旧沢地形 1箇所		土師器・須恵器・刀子 陶磁器・基石状土製品 銭貨			
	散布地	近世 時期不明 平安以降 時期不明	土坑 25基 溝跡 1条 溝跡 3条					

青森県埋蔵文化財調査報告書第295集

隠川(11)遺跡Ⅱ

—国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 平成13年2月28日

発行 青森県教育委員会

〒030-8540 青森市新町二丁目3-1

編集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森市新城字天田内152-15

TEL 017(788)5701 FAX 017(788)5702

印刷所 青森オフセット印刷株式会社

〒030-0802 青森市本町2丁目11番16号

TEL 017(775)1431 FAX 017(775)1435



活彩あomor
—輝くあomor新時代—